

陰陰陰莖

人里外れの雜木林を、一組の男女が歩いている。この時期にもなると虫の声も聞こえず、落ち葉を踏む音が響くばかりだ。夏場なら腐葉土の臭いでむせてしまふところだが、気温も湿度も低い今は、さほどでもない。

「いやあ、まさかあの八雲藍殿をご案内できるとは。光榮な限りですな」

男は重たい身体をゆさゆさと揺らしながら歩いている。体格は随分たつぶりしており、トドを彷彿とさせる。笑みを形作ろうとしているが、余り氣味の頬肉が邪魔になつていて、いかにも成金然としていた。口では光榮と言つてはいるが、視線に敬意は一切ない。

対する女はといえば、度肝を抜かれるほどの美女だった。木葉の隙間から漏れる月光に照らされる様は、なにかの絵画かと思うほどだ。一目見られただけでも天運に感謝すべき美貌だった。そんな彼女、八雲藍を、男はこともあろうに嘲りをもつて眺めていた。

「うッ」

「失礼。返答がなかつたようなので、寝ておられるのかと」

唇を引き結び、興味がないと言わんばかりに無言を貫いていた藍だが、小さく呻く。首が絞まつたからだ。彼女の首には、ベルト式の首輪が嵌められている。リードは、彼の手元まで繋がつていた。

まるで畜生扱いだ。一般的に、このようなものを着けられるのは屈辱的などだ。妖獸

は特にそう感じる傾向があるし、まして藍のような誇り高い者ともなればなおさらだつた。このような無礼を働いた者には、相応の償いをさせるのが常だ。だといふのに彼女は、逆らうことなく、男に従つていた。

しばらくすると、茂みをかき分け歩く二人の前に、一軒の小屋が姿を現す。古めかしく、うち捨てられた見た目だ。だが骨組みはしつかりしているし、屋根などは整備されている。詳しい者が見れば、放棄されているように偽装しているのだと気づけるだろう。わざわざオンボロだと偽るのは、よからぬことが催されるからだ。それを証明するかのごとく、扉は見るからに立派で重たい。招かれざる者の侵入を拒んでいるのだ。

「さあ八雲殿、こちらを」

扉に手をかけた男だったが、思い出したようにこちらを振り返る。懐から、一包の粉薬を取り出し、差し出してきた。飲めというのだろう。

受け取り、すがめる。包まれているのは、薄気味悪い桃色の粉末だ。絶対にろくなものではない。それでも藍に、受け取る以外の選択肢はなかつた。

口を開き、舌を突き出す。得体の知れない粉を、さらさらと舌へ、喉へ滑らせていく。艶やかな唇や口腔粘膜が粉末を飲み下していく様を、男はねつとりとした目で眺めていた。不羈な視線でじろじろと見られていることを、藍はもちろん把握している。それでも、

何一つ文句は言わなかつた。

「よろしい、では」

彼女が薬を服用したのを確認し、男は扉を開ける。ぎいいい、と軋む音を立てたりはしない。蝶番にきちんと油が差されている。見た目と裏腹に、よく整備されている。板張りの室内は、調度品がろくにないのもあつて広い。ちょっとした集会所なみの広さはあつた。照明は天井から吊されたランプだけで、すこし薄暗い。

小屋の建付けはしつかりしていた。おんぼろで隙間風の吹き込みそうな外見とは裏腹に、そうそう崩れたりはしなそうだ。壁は分厚く頑丈で、外の音は聞こえてこない。反対に、中の音が漏れることもないのだろう。秘密の会を行うにはぴったりだ。ちゃんと管理しておかないと、あつという間に子供の秘密基地にされてしまいそうな気もするが。

「おッ、来たぜお前ら、旦那のご到着だ」

床べたに座つた十数名の男達が、酒とつまみを広げていた。こちらを見ると、ニヤリと笑い、酒を雑に片付け始める。まだ中身が残っていた瓶が、ひっくり返つて床を濡らす。誰も気にも留めなかつた。

「へへへ、布屋の旦那、随分遅いご到着だつたじやないですか。それで？ その女が今回の主賓つてわけですかい」

ご馳走にアリが群がるように、彼らはじわじわとにじり寄つてくる。藍の連れ、布屋と呼ばれた男に比べると、随分と貧相な身なりだつた。どいつもこいつも顔に品性がない。ごろつき、ちんぴらといった言葉で呼ばれるような、落伍者どもだからだ。ろくな生活を送つていなければ、近くにいるだけで漂う濃い体臭からも明らかだ。

彼らは、布屋の子飼いの連中だつた。表向きにできない汚れ仕事を担当する者どもだ。その中の一人が、揉み手をしながら二人の様子を窺う。

幻想郷における地位でいえば、八雲の式たる藍がこの中でもトップだ。だが、男たちの媚びは、もっぱら布屋にのみ向けられていた。彼女に向けられている目は、明らかな侮蔑の色を孕んでいた。

「うむ。今夜はこの雌狐と、あとは塩屋の主人がもう一匹、連れてくるらしいが……おお、噂をすればなんとやらだな」

布屋が頷くと同時に——多分頷いたのだろう、顎が肉に埋もれているので分かりにくいくらい後ろから扉が開かれる。現れたのは、里でも有数の資産家にして好事家と評される男、すなわち塩屋の大旦那だった。やはり肥満体で、鼻筋に大きなイボがある。

布屋同様、彼もまた、黒い一面を持ち合わせている。ぞろぞろと、子飼いのちんぴらを引き連れている。また、やはりリードを手に持つていた。紐は、後ろに立つ女に繋がつて

いた。キヤミソールにスカートという出で立ちで、やはりごつい首輪を嵌められている。きっと彼女が、話に上がった「もう一匹」なのだろう。それとなく観察すると、どうも見覚えがあつた。というか、藍はその女をよく知っていた。何なら、毛嫌いしていた。

妖獸であり、イヌ科特有の、やや尖った三角形の耳。肩の辺りでざっくり整えられた、柔らかい癖つ毛。髪飾り代わりに着けた、バカみたいな緑の葉。人を小馬鹿にしたような厚底の丸眼鏡に、妖獸としての品位を感じない、無駄にでかくて邪魔な一本尻尾。

それは、幻想郷の狸の親玉、佐渡の大明神、二ッ岩マミゾウ本人だつた。

狐と狸は、この言葉で例えるのは奇妙だが、犬猿の仲だ。道ばたで出くわせば、嫌味と皮肉の応酬が始まるくらいには。だが今、二人は黙りこくつていた。顔には、同種の感情が浮かんでいる。お前もか、と。

二人揃つて、溜息を吐く。見られたくない相手に見られたくないところを見られたが、向こうも同じように感じているのだろうから痛み分けだ。そういう思いが表れていた。

「いやあ、塩屋殿、ご無沙汰しておりますなあ」

「布屋殿も、お元気そうで何より」

彼女らのややこしい感情のやりとりをよそに、布屋と塩屋はつらつらと挨拶を交わす。塩屋が引き連れてきた子飼いの男共も、ぞろぞろと小屋の中に入る。彼女らに、嘲った色

の視線が向けられる。

「何をほさつと突つ立つてゐるんだ雌共。さつさと我々に挨拶をせんか、人間様は挨拶から社交を深めるのだ。そんなこともわからんとは、ケモノはこれだからいかんな」

塙屋が口元を歪め、吐き捨てる。声色からは、あえて罵倒しようという努力は窺えない。ことさらに意識するまでもなく、妖獸という種を見下しているのだ。

妖獸は長きの時を過ごしてきた者が多く、そのことを誇りに思つてゐる。ゆえに、ただの獸と同列に扱われることを嫌う。藍やマミゾウのような大妖怪は特にその傾向が強い。ケモノなどと呼んだヤツには、生まれたことを後悔するような仕返しをしてきた。

それでも、二人とも、何もしようとなかつた。それどころか、恭しく男達に頭を下げ、言われた通りに自己紹介を始める始末だつた。

「皆様、妖獸の八雲藍と申します。今宵は私のような雌狐のためにお集まりいただきて、心から感謝致します。どうか淫乱な私めのおめこを皆様の逞しいもので貫き、精をお恵みくださいませ」

「同じく、妖獸の二ッ岩マミゾウと申します。皆様のおチンポを味わいたくてたまらず、こうして可愛がつていただきに参りました。どうぞ私におチンポを奥までずつぼしハメて、中にたつぶりザーメンをブチまけてくださいませ」

四五度の最敬礼とともに、気が狂つたような言葉を並べる。彼女らを知る者が聞けば、仰天するような台詞だった。

とはいへ、乱心したわけではない。藍の場合は、布屋に事前に仕込まれた台詞を、一字一句そのままピートしただけだ。横で同じく頭を下げている女にしても、同様に塩屋に言い含められていたのだろう。本気の言葉ではない

「……それで？ 貴様は一体何をしてるんだ、二ッ岩の」

頭を下げたまま、小さく呼びかける。認めるのはたいへん癪だが、彼女はかなり能力も立場もある妖怪だ。無論、こんな下衆共の溜まり場で、男に媚びるような立場ではない。マジで何をやつているんだと、藍はいささか呆れ返つていた。

「それはこつちの台詞じや。念のために聞くが、天下の九尾狐が、まさか自分からこんな連中に身を売り渡したというわけではなかろうな？」

「その通り。こういう奴らは趣味ではない。私の場合は、紫様のご指示だよ」

八雲藍は大変な好色家であり、オトコを侍らすのを趣味としている。しかし、こうして嘲笑われるのは、全く好みではなかつた。それでも我慢しているのは、ひとえにこれが、主の命令であるからだつた。

——里に布屋をやつてる男がいるの。彼に調教されときなさい。尽くしてくるのよ。

あまりにも赤裸々極まる指示に、最初は自分でも耳を疑つた。結局、主人は本気だつた。本気だつたからこそ、藍は今こうして、里の秘密の輪姦パーティに参加している。下衆の視線を浴びせられながらにして、怒りもせず受け入れてているのは、そういうわけだつた。

「まあ、私ほどの女を差し出せば、得られる対価は相当なものになる。今回のことを機に、人里での影響力を強めようとでもお考えなのだろう。……で、お前はどうなんだ。誰かに命令されたわけではないだろう？ 仕える主を持たない身なんだからな」

反対に尋ね返す。マミゾウはしばらく黙り込み、ゆっくり口を開いた。

「儂の場合は、まあ、資金調達の一環といつたところかの。部下の狸どもは雄ばかりじゃ。こういう手段でのカネ稼ぎには向かん」

資金調達とやんわり表現しているが、要するに金貸しの仕事が行き詰まつたのだろう。それほど人口の多くない幻想郷において、外の世界と同じやり方が成り立つはずはない。環境の変化に対し、商売のやり方をアップデートできなかつたのだ。

「おい、何をブツブツくちやべつてんだよ、ええ？ 真摯にお願いもできねえのかよ、間抜けマンコどもがよお？」

ごろつきの一人が、煽るように言う。八雲と二ツ岩相手に、まったく大した度胸である。普段ならそんな口を叩いたことを後悔するほど化かすところだが、今回ばかりは、先ほど

説明したような事情がある。甘んじて受け入れるしかなかつた。

布屋は深く腕組みし、二人の様子を眺めていた。フン、と鼻を鳴らす。

「言葉面はともかく、どうもいまいち誠意を感じない挨拶でしたが、よしとしましよう。お二方がどれだけ真剣にハメられたがつてゐるかは、態度で示していただくこととします。さあ、いつまでもアホみたいに頭を下げていなくて、服を脱いでいただけますかな」
挨拶せよと命じたのは自分達のくせに、ずいぶんな物言いだ。しかも服を脱げなどと、ぞんざいな扱いにも程がある。

思うところは大いにあるが、藍は逆らわなかつた。彼に調教されよというのが、主人の命令なのだ。今、彼の言うことは、主人の言うことも同然である。

まずはお前からだというように、頸をしゃくられる。それを受け、いつもの道士衣装に手をかける。一枚一枚、その場に脱ぎ捨てていく。

「おつおつ、八雲の式のストリップショードぜ、うへへ」

「おい、もつと色っぽく脱げよオ」

ごろつき共が囁き立てる。動物だなんだと罵つてこそいるが、露わになる女体を前に、視線は釘付けになつていた。

八雲藍は、かつては傾城傾国とまで呼ばれたことのある女だ。そしてそれほどの称号は、

美貌一つで得られるものではない。どんな軍師も及ばぬ策謀、どんな政治家も及ばぬ弁舌は欠かせない。無論、老若男女を問わず視線を惹きつける魅惑の肉体も、必須だつた。

柔らかでありながらしつかりとしており、しなやかでありながらたっぷりとしている。白くきめ細かな肌は、その下を走る静脈を透けさせているほどだ。性という概念を具現化した肉付きは、御年九十の老人のモノだろうと一発で勃たせるほどの破壊力を秘めている。そんなむつちりしながらもくびれた極上の身体が、とびきりはしたなく飾られている。スリングショットと呼ばれるV字型の、赤色の水着を、彼女は道士服の下に着ていた。

分類上は水着なのだろうが、これを遊泳のため着るバカはいるまい。というのも、被覆面積があまりにも小さいからだ。ほとんど紐であり、辛うじて乳と陰部が極小の布きれで隠されている程度だ。後ろに至つては、左右の尻肉に紐が思い切り食い込んで、ヒップを隠すどころか思い切り強調している始末だ。水着だからといって水泳などしようものなら、やんごとなき部位がアツという間に露わになつてしまふことだろう。

情熱的な赤色も相まつて、あまりにも下品に見える。明らかに、女の身体を男の欲望のために飾り立てることを目的とした衣装だ。もちろん藍とて、好んでこんなバカバカしいものを着たりはしない。布屋に命じられて、渋々着用したのだつた。

結果的にいつて、彼のセンスは相当なものだつたといえる。ただでさえ極上の肉体に、

卑猥な水着が食い込んだことで、彼女は極まつた淫猥さを醸し出している。気弱な者なら見ただけで射精してしまいそうな、痴を極めた美が生み出されていた。

「っへへ、見ろよお、とんでもねえぞ、マジで」

ごろつきどもは息を飲みながら、彼女の肉体を改めて眺めていく。

すらりとした首は肩の稜線につながり、しなやかな鎖骨に合流する。軽やかに伸びる様は羽のようだ。世間の女が血涙を流し羨むほどのデコルテラインだった。

視線を少し下らせると、溢れんばかりの乳房にいきつく。普段は道士服で隠れているが、成人男性の手でもあまるほどの巨乳だ。カップでいえばGは優にある。

驚くべきは、それだけのサイズでありながら、全く形を崩れさせていないことだつた。瑞々しく滑らかな肌に象られた輪郭は、乳の理想というべき蠱惑的な曲線を描いている。誰であつても手を伸ばし、触れ、揉みしだかずにはいられない類いのものだ。見るからに柔らかでありながら、呼吸のたびにふるふる震える弾力をも兼ね備えている。

たわわなる山の先端は、有つて無いようなスリングショットの布地にどうにかこうにか隠されている。少なくとも、ちゃんと隠されている、とは口が裂けてもいえない。極小の布地から、桃色の乳輪がハミ出してしまっている。なにより、布の上に乳頭のシルエットがぼつちりと浮かんでいたからだつた。

「オイ見ろよ！ コイツ乳首勃起させてんぜ！」

男の誰かが叫ぶ。宝島を見つけた海賊のような、興奮に満ちた声色だ。

途端、室内に男共の歎声がこだまし始める。期待してんのか、淫乱がよ、という罵声を、
彼女はまるりとした口を引き結んで無視した。

男達の視線は、さらに下へ向かう。すらりとくびれつつも絶妙なバランスで肉を蓄えた
腹回りは、それだけであらゆるオトコを魅了する。ゆつたり広がった腰骨が、ハメ倒して
やりたいという暴力的欲求を見る者に喚起させる。存在しているだけで、異性を誘惑して
いるかのようだつた。

「ははあん、ハミ毛してやがる。澄ましたツラして、下品な女だなあ」

誰かがそのように呟く。見間違いではなかつた。妖獸は 基本的に体毛の濃い種族だ。
陰毛も例外ではなかつた。黄金色の草叢は、形こそ整えられているものの、しつかり生い
茂つていた。ほとんど紐であるスリングショットでは到底隠しきることなど出来ず、はみ
出してしまつてゐる。

確かに下品だ。しかし同時に、強烈なセックステアピールを醸し出していた。その証拠に、
彼らは一様に、藍の股間に視線を注いでいる。とはいへ、彼らも毛ばかり眺めているわけ
ではない。むしろ、そこから少し下を見ている。つまり、恥部をだ。

一応は衣装なので、スリングショットは彼女の秘部を隠している。僅かにでも身じろぎすれば露わになつてしまふような際どさではあるが、いちおう、肉貝は覆われている。

とはいへ、覆われているから安心とは言えない。なんといつても、紐のような布地は肌にぴったり張り付いて、その下にあるものの形をくっきり浮かび上がらせていたからだ。

何故そのようになつてしまつてているかといえば、答えは一つだ。

「おほお、もうヌレヌレじゃねえか、八雲の大妖怪サマが、チンポ期待してんのか、ええ？」

男どもが嘲つてくる。言葉の後半はともかく、前半はまったく正しかつた。つまり藍の秘裂は、スリングショットをぐつしょりと濡らすほど、愛液を分泌させていたのだ。湿気を帯びた布は、肌によく張り付く。結果、いわゆるマン筋がはつきりと浮かんでいたのだ。

確かに彼女は好色だが、普段から下腹をこうもはしたなくしているわけではない。小屋に入る前に飲まされた、あの怪しい薬のせいだ。どれほど強力なものだつたのか、力ある妖怪が自然に持つ薬毒耐性を貫通したうえで、しつかり効果を發揮している。

「はあツ……くはあ」

乳首が勃起しているのも、陰唇が涎を垂らしているのも、全てあの薬のせいだ。意思と関係なしにこみ上げてくる情慾を誤魔化そうと、凜とした表情を浮かべている。だがその目には、ときおり、隠しようもない雌の色が浮かんでいた。

女殺しの媚薬によつて、彼女の理知的な美貌は紅潮している。自然と汗が滲み、美しい肌の上で照明の光を乱反射させる。何千もの細かな宝石で飾られているようだ。

「おいマンコ、後ろ向けよ、後ろ。そのデカケツを晒すんだよ」

男達に囁される。普段ならば、決して主人以外の命令など聞き入れはしない。だが今は、大人しく従うほかになかった。

極上の肉が、瑞々しい肌に象られている。白い背中は、何も描かれていないキヤンバスのようだ。欲望の絵の具でどろどろにしてやりたいという、男共の下衆な欲望を煽る。

豊かながらもつんと上向いたヒップは、見ているだけで涎が垂れてしまふ類のものだ。薬物による性的興奮にうつすら色づいた臀部が、スリングショットによつて左右に分かれ、くつきりと強調されている。艶やかな九尾に飾り立てられる様は、もはや芸術的猥褻だ。

「うおおお……」

男達は惚け、感嘆の溜息を漏らしていた。それはあの、布屋にしてもだ。ぽつかりと口を開く様は、間抜け以外のなにものでもない。

「おつと……いかんいかん。まったくとんでもないケツですなあ、突つ立つてゐるだけであ男を誘惑してチンポを勃起させにかかるとはッ」

「くッ……！」

ぴしゃりと、尻肉に軽く平手を入れられる。大妖怪ともなればこの程度は痛くも痒くもないのだが、しかし藍は小さく身体を震わせた。ほんの僅か、本来なら小指の爪の先程度にしか存在しないはずの性感を、薬が何倍にも膨れ上がらせたためだ。引きつった吐息は、嬌声を抑えようとした結果漏れたものだった。

ヒップも魅力的だが、脚も負けず劣らずのものだつた。すらりと長く、しなやかであり、適度に脂肪を纏っている。触みたい、舐めたい、顔を埋めたい、踏まれたい、扱かれたい、そういう下世話な欲望を抱かせてやまないものだった。

しかも今の彼女が履いているのは、これでもかというハイヒールだ。スリングショット同様、布屋に押しつけられたものだ。客観的には、とてもない名判断だったといえる。もともと美しいレッグラインがさらに強調され、さらには女としての魅力に溢れた臀部と組み合わさる。まさに男狂わせの凶器、美に対する挑戦だつた。

「おお……。いや、とんでもないな、まったく。そんな雌の身体で大妖怪を名乗るとは、恥ずかしくないのか？ んん？」

突如として現れた傾城ボディに、男達もしばらく我を忘れ見とれていた。数秒後、塩屋はやつと我に返ると、ばつの悪さを誤魔化すように呟いた。

「よし、それで、次はお前だ、雌狸」

「……ふん、後で覚えておれよ」

塩屋は続いて、マミゾウに視線を向ける。雑に顎をしゃくつた。彼女は下唇をぎゅうと噛みしめていたが、吐き捨てるように鼻を鳴らす。結局、己の衣服に手をかけるのだった。滑らかな指が、キャミソールの裾を掴み、ゆっくり持ち上げていく。

ところで彼女は、控えめにいつてむつちりとした、ふくよかな肉体の持ち主だ。胸も、衣服の上から分かるほどの大爆乳だ。そのため、脱衣は容易ではない。柔らかな下乳が布地に引っかかり、一緒に持ち上がる。ぐつ、ぐぐつと布が山を登り、やがて山頂を越える。

「おおッ！」

支えを失った両乳房は、ぶるん、あるいはぱるんっと、重量を感じさせる動作とともに溢れだした。男達から歓声があがる。性的興奮以前に、滅多にない光景に感動したらしい。「いやあ、ドスケベ女が二匹も並んで、とんでもねえ光景だな」

「ひひッ、こいつあ楽しめそうだぜエ、骨の髓までしゃぶり尽くしてしゃぶらせてやる」

マミゾウの横には、卑猥な衣装を身に纏う傾城傾国の美女が立ち、性の興奮に熱い吐息を漏らしている。普通、このような状況では、そんじよそこらの女が肌を晒したところで、視線を集めることなどできはしない。

だがマミゾウは、見事に男達の目を惹きつけていた。別段、不思議なことではなかつた。

なにせ彼女は、八雲藍と同格とまで言われる妖獸。その肉体の美しさも、美の方向性こそ違うものの、藍に並び立つだけのものを備えていた。

普段の蓮つ葉な言動と打って変わつて、マミヅウの肌や肢体は、非常に女らしいものだ。たっぷりむつちりと肉を纏つており、抱きつき頬ずりしたくなるものだ。どこもかしこも丸みを帯びた曲線によつて象られた様は、どこか土偶を連想させる。だが、原始的芸術である土偶とは違つて、現代的なセクシーさに溢れてもいた。

「つひよお、エロいねえ」

そんなカラダが健康的な色づきの肌に覆われてゐる様は、女性の、雌の魅力を煮詰めて形にしたかのようである。乱暴に押し倒し、むしゃぶりつき、雄の欲望で支配して、柔肉が卑猥に震える様を見たい。そのような暴力的欲求を湧き起こらせるものだつた。

そしてその極上の肢体は、藍同様、卑猥に飾り立てられてゐる。彼女もまた、スリングショットを身に着けていた。白色で、藍が纏う赤とコントラストをなしている。

被覆面積は同程度なのだろうが、マミヅウの場合、肉付きが大変にたっぷり、むつちりとしている。相対的に布地はいつそう小さく見え、姿はいつそう際どくなつてゐる。男達の下卑た欲望を煽り立て、股間を膨らませるには十分すぎた。

柔らかな曲線を描く首は、なだらかな肩と行き当たる。肉付きの良さゆえ、鎖骨は薄く

輪郭を浮かばせる程度だが、むしろそれが彼女の身体の女性らしさを強調させていた。

とはいへ、最も目を惹きつけるのは、やはり乳房だろう。藍のもたいがい豊満だったが、こちらはそれ以上、はちきれんばかりだった。カップでいえばJ、へたをすればKに至る。トップバストの数値は、百を軽く越えるだろう。

豊かさたるや、ただ単に山のようと表現するのも不足なほどだ。もはや、靈峰だとか、そういうつた特別なもので例えるべきだろう。圧倒的、と評するほかになかった。

それだけのサイズなので、つんと上向いた美乳というわけにはいかない。重力に従い、ある程度は垂れ下がることになる。とはいえそれは、醜さや見苦しさにはつながらない。どちらかといえば、自然ならではの伸びやかさ、美しさを演出していた。

あふれんばかりの爆乳ゆえか、乳輪もかなり大きい。色も濃く、肌と対照的だ。しかも全体がこんもりと盛り上がっていた。いわゆる、パフィーニップルだ。そして何より目をひくのは、その先端だろう。本来はぷっくりとした尖りの存在するべき場所には、小さな窪みが存在していた。見られることが恥ずかしいのか、乳頭は乳肉の中に姿を隠している。見事なまでの陥没乳首だった。

ところで、それが分かるということは、乳房がまるきり露出しているということを意味

する。言い換えれば、スリングショットに被覆されていないということだ。

「むッ……！」

ろくに被覆しない紐じみた衣装は、ちょっとの衝撃で簡単にズレる。先ほどの脱衣の際、乳房が暴れ出した勢いで、小さな布地は案の定ズレてしまっていた。

ようやくそのことに気づいたマミゾウは、撥ねられたように布を元に戻す。とはいっても、時既に遅しだ。男達は完全に見下した目で、彼女を眺めていた。

「へつ、まさかあの二ツ岩の大狸の乳首が、あんな恥ずかしがり屋さんだつたとはなア」「隠してんじゃねえよ、出せ出せ。あとで俺らがそのシャイなお乳首ちゃんを、たっぷり可愛がつてやるよ。泣き入れてもやめてやんねえから、覚悟しておけよ」

ニタニタと嘲笑を浴びせられ、彼女の喉からグッと奇妙な音がした。藍には、その音の意味するところがよくわかる。怒号を、すんでのところで呑み込んだのだ。

彼らを怒鳴りつけ不興を買つたりすれば、己の目的は果たせなくなる。二人とも誇りを胸に抱く大妖はあるが、それくらいの理性的な判断はできた。

彼らの目は下へ向かう。つまり腹へ。そこは肉がたっぷりとあふれんばかりで、豊満な印象の最大の出所となつていて。横に走った臍が、もつちりした印象を一際強めていた。

これほど肉を蓄えていれば、普通は見苦しいセルライトになつてしまふ。だがマミゾウ

の場合は、全くそのようなことはない。肌の滑らかさもあつて、餅のような印象を見る者に与える。まるで肉の枕だ。

「オイ、スカートも脱ぐんだよ。ケモノは理解力が足んなくて困るぜ！」
目を血走らせた男達から、罵声とイコールの命令が飛んでくる。目の前の女の恥部を、今すぐ見たい。そんな欲求に突き動かされているようだつた。

地獄の餓鬼どものような輩だ。

マミゾウのひたすら硬い表情からするに、そんなことを考えているのだろう。それでも結局、拒みはしなかつた。己のスカートに手をかけ、ホツクを外し、その場に脱ぎ捨てた。
「うひょう！ へつへ、ムツチムチだぜ、最高に好みだ。勃起が止まんねえ」
「今すぐにでも押し倒してレイプしてやりてえよ。ヒヒッ、期待してろよオ」

上半身はむつちりとしたものだつた。応じるように、下半身もどつしりとした、重量感あるものだつた。骨盤は大きく広がり、何人も孕ませてやりたいという欲求を搔きたてる。彼女も妖獸なので、藍と同じく体毛は濃い。しかも彼女の場合、整えるのを習慣づけていなかつた。おかげ様で、下腹では栗色の縮れ毛が茂りに茂つてゐる。スリングショットの頼りなさすぎる布で覆うことなど絶対に不可能だつた。はみ出すどころの騒ぎではない。
「うひょおッ、下品なマン毛だな！ 誰かに見てほしかつたのかよ、ええ!?」

その匂い立つような卑猥さたるや、男達が色めき立つほどだつた。明らかな興奮が目に浮かんでいる。その場でペニスを扱き始めたとしても、なんら不思議ではなかつた。

もさもさと茂る密林に守られる貝は、やはりスリングショットにシルエットをくつきり浮かび上がらせていた。彼女もまた、あの得体の知れない薬を飲まされていたに違いない。頬は紅潮しているし、身体にはうつすらと汗が浮かんでいる。ぐじゅぐじゅと濡れそぼつ淫肉により、布にはじつとりと濃い染みが浮かんでいた。むわあと、雌の匂いが漂うほどだ。「さつきから不満そうなツラしてつけどよお、内心じやハメられたがりまくつて、マンコ見りや分かるな、ええ？」

げらげらと、下卑た嘲笑とともに煽られる。これほど濡らしてしまつていては、どんな反論も意味を成さないだろう。

「おい、ケツだ、ケツ見せんだよ！」

誰かが、もはや我慢ならぬとでも言うように叫ぶ。極上の雌二匹の肢体を眺めるという行為は、彼らの嗜虐心と雄としての欲望とこれ以上なく刺激していた。

マミゾウとて、己が下卑た欲を充足させるための道具にされていることは理解しているだろう。それでも、従う以外に道はなかつた。言われるまま、彼女はくるりと踵を返す。見ているだけで舐め回したくなるような背中が露わになる。スリングショットが背骨に

沿つて走る様は、どこまでも広がる平野を走る国道のようだつた。なんとも風光明媚だが、彼らの視線はむしろ、より下に向けられている。すなわち、ふさふさとした立派な尻尾に飾られる、魅惑の臀部をだ。

尻といふのは、乳房や腹部同様、女性の肉体においてとくに肉を蓄える部位といえる。彼女はその典型だつた。ヒップにはまんべんなく、はち切れんほどに肉が詰まつていた。おそるべき弾力と柔らかさを両立させていながら、一目見て分かるほどだ。大臀筋の基礎に支えられ、垂れることなく、歪みの一つもない、プリツとした完璧な曲線を描いている。赤子を思わせる張りと艶のある肌に覆われた様は、さながら二つの満月のようだつた。

本来ならむちむちと押し合いへし合いするのだろう双月は、くつきりと断絶している。他でもない、くつきりと食い込んだスリングショットのせい、またはおかげだ。谷間深く入り込んだ紐が、魅惑の尻たぶをこれでもかというほどに目立たせていた。

そんな美臀を飾る脚は、やはり驚くほどにむつちりとしている。藍同様にハイヒールを履き、強調されたレッグラインは、悪し様に言つてしまえば太い。とはいえ、太い脚は、決して悪いものではない。彼女の場合はなおさらだ。魅力的な肉を纏う脚部は、男の視線をぐんぐんと惹きつける。吸いつきたい、むしやぶりつきたい、ペニスを擦りつけて白濁をみれにしてやりたいという下卑た欲望を抱かせる魅力を備えていた。

「つははは、とんでもねえなあコイツらは！ 全身スケベのカタマリだぜ!?」

「こんなエロ女どもがハバキかせてんのが今のはうが、信じらんねえな」

「ああもう我慢できねえ、今すぐブチ込んでやりてえよオイツ」

ごろつきどもの様子は、当初とは全く違っていた。最初は、こちらを爬虫類じみた目で見つめ、冷笑していた。今は、極度の興奮に支配されており、すぐにでもこちらめがけて飛びかかるべきそなほどの獸欲を見せつけている。

そうなるのは、ある意味当然のことといえた。どれほどカネを積んでも、触ることはおろか、見ることすらかなわないほどの女体を目の当たりにしているのだから。

「ふん、騒ぎすぎだゴミ共。少し大人しくしろ」

興奮を醒ますのは、塩屋の大旦那のしわがれた声だ。鼻筋のイボを弄っている。

「女とみたら犯したがるとは、お前らは性急すぎる。よく見ろ。こいつらは突っ立つててだけでマンコを濡らすような雌豚、畜生、ケモノどもだぞ？ きちんと躰をしてやらねば、人間様がハメてやる価値もないわ」

ぎょろついた目が、嗜虐的な好奇の色を浮かべる。ろくでもないことを言うつもりだ。

「そおら雌共。お前らハメてほしいんだろうが？ なら地べたに頭を擦りつけて、お願ひするものが筋だろう。もちろん、とびきり間抜けで卑猥で無様な台詞でな」

ハン、と笑うと、彼は床へ額をしゃくる。自分から土下座して、媚びてセツクスを乞え。そう命令しているのだ。

身震いするほどの屈辱に、顔が歪みかける。慌てて、平静を保つ。感情を露わにすれば、いちやもんをつけてくるだろう。そうなれば、もつと面倒なことを命令してくるはずだ。となりで黙りこくつているマミゾウも、同じ考えでいたらしい。二人は反論することもなく、黙々と床に膝をつく。それを遮ったのは、布屋の男だった。

「おやおや、なりませんぞ。お二方ほど高名なる方々が、なにも硬い床に直接座ることはないでしよう！ 膝にも負担がかかるし、ククツ、板張りだから冷たいでしよう？」まるでこちらを気遣っているかのような言葉だ。そんなわけがないのは、目と口元から明らかだ。どう見たって、笑いを堪えている。

「ブツ……失礼、座布団があればいいのですが、そんなものは用意しておりませんでな。ですから、くふ、ツ、自分が今脱いだ服の上にでも、座つたらどうですかな？」
「……お心遣い感謝します。そのように致します」

提案する口調ではあるが、当然、断る権利はこちらはない。心の中を燃えさせつつも、脱ぎ捨てた服の上に座る。そして、床に額を擦りつけた。
「皆様、私八雲藍は、このような卑猥な格好で男性を誘い、股を濡らしておチンポを乞う

淫乱な雌でござります。どうぞこの雌狐の淫乱あばずれマンコを、心ゆくまでズツボシとご賞味いただき、濃厚な種をたっぷりとつけてくださいませ」

「二ッ岩マミヅウは、年がら年中卑猥なことを考え、年がら年中おめこを濡らす淫乱狸でござります。どうぞ私めを押し倒し組み伏せ、おチンポで調伏して、子宮をお精子まみれにしてくださいませ。雌としての分際を、おめこの奥まで教え込んでくださいませ」

一瞬、静かになつた。その後、音の爆発が起きた。男共が一斉に哄笑し始めたのだ。

「は、はは、オイ聞いたかよ、あの八雲藍が、二ッ岩マミヅウが！ 僕らみたいな連中のチンポねだつてるぜ、土下座してな！」

「しかもマンコ濡らしまくつてんもんな！ こりやア氣絶するまでハメ倒してやらねえと可哀想つてもんだ！」

「ちげえねえ！ おいマンコ共、今夜一晩で股の穴ツボコが閉じなくなるからな、今の内に覚悟しとけや！ ああ、お前らにとつちやあ期待かア!?」

げたげたと、品位のない笑い声を縫つて、下衆そのものの会話が聞こえてきた。

「くう……」

喉の奥から、声が漏れる。恥辱に冷える心と裏腹に、薬の回ったカラダは、燃え上がるようになくなっている。阿呆のような言葉を並び立てただけでも、陰唇はとろとろと蜜を

滴らせていた。まるで、自らが言つたことの、実現を願つてゐるかのように。

スリングショットのクロツチは、見るも無惨なほどぐしょぐしょに濡れてゐる。淫蜜は小さな布地ではとても吸いきれず、太腿にまで滴つて、透明な筋をつくつてゐた。
塩屋の主人が手を振る。静まれという意味だつたのだろう、数秒のラグを挟み、男どもの笑いは収まつた。

「雌狐に雌狸。お前らの気持ちはよく分かつた。恥知らずでろくでもない変態妖獸二匹の赤裸々な告白に免じて、それなりに可愛がつてやるとしようじゃないか。立て」

言われるがまま、立ち上がる。薬がいよいよ回つており、乳首や陰核は痛いほどに勃起している。蜜は溢れて止まらず、床にまで滴らんばかりだつた。

「お前らのようなケモノには、これがお似合いだろう。布屋殿もそう思うでしよう？」
「ええまつたく！」

塩屋と布屋がそれぞれ取りだしたのは、手枷だつた。革のベルトが鎖で繋がれている。

二人は藍とマミヅウに手を出させると、素早く枷を取り付ける。明らかに手慣れていた。もちろん、こんな拘束に意味はない。彼女らほどの妖獸であれば、鋼鉄の鎖で雁字搦めにされたとしても、力づくで脱出できるだろう。

もつとも、できるからだとやつていいのは別だ。彼らの機嫌を損ねるのは厳禁だ。結局、
されるがまま、バカバカしい拘束を受け入れるしかなかつた。

「よつと……」

天井を走る梁から、フックが吊り下げられている。男達は二人の手を取ると、枷の鎖を
フックにひっかける。卑猥なる二つの肉体が、天井から吊り下げられた。フックの高さが
また絶妙で、ハイヒールの踵がギリギリ浮くか浮かないか、といったところだ。もつとも
レッグラインが美しく見える位置であり、ある種芸術的だ。狙つているに違ひなかつた。
「いやあ、こんな変態みたいな格好させられて、無様でござりますなあ、八雲殿？」

布屋が近づいてくる。抵抗出来ないのを良いことに、ほぼ裸体の藍を抱きしめてくる。
この女は私のモノだとでもいうように、全身を撫で回していく。

「何をしてらつしやるので？　男に言い寄られたら、あなた方のようなマンコは、黙つて
口を開けて濃厚キッスするのが礼儀でしようが。ンぶぢゅるうう」

「ンツ、ぶぢゅうツ、ぢゅる。ツくふ、くうツ、んむうう」

当然の権利だというように、唇を奪われる。舌をぢゅぼぢゅぼとしゃぶりたてられる。
本人の性格同様の、ねつとりとした、しつこいキッスだ。官能をかき立てられている状況
で味わうには、いささか刺激的すぎる。

「ぢゅるうツ、れろツ、くふううツ、んふツ、おうツ、んうううツ」

「うおおお、おい見ろよアレ、とんでもねえなア」

「やつぱ心底淫乱なんだな、興奮するぜ、へへへ」

唇を貪りながら、クイツ、クイツとスリングショットを引っ張つてくる。淫貝に布地が食い込み、恥丘はそのほどんどを露わにする。

陰核を擦られるもどかしい刺激に、腰までくいくいと動いてしまう。その卑猥なる様に、周囲の男達は色めき立っていた。

「ぶはあ……。いやあ、顔が蕩けておりますな。己が今、どんな顔をしているかお分かりですか？ とんでもないメス顔ですよ。歩いているだけでレイプされるのは間違いなしだ」腰のあたりを撫で回しながら言う。ブラフに違いない。自分は彼に対して、眉を逆立て、鋭い目を向けているはずなのだ。メスの顔など、浮かべていない。

「信じられませんかな？ 証拠を見せましょか。あちらをご覧なさい」

言われ視線をやれば、マミゾウも、同じようなことをされていた。塩屋に腰をがつしり抱かれながら、掌から溢れるほどの爆尻を、好き放題に揉みしだかれている。

「ああツ、う、あはあ、やめんか、このお」

我が物顔で身體を弄ばれ、もちろんマミゾウは拒む。その声は、ハツ、ハツ、という、

熱い吐息混じりのものだった。

「何だとお？　自分の立場が分かつていないうだな、ええ？」

躊躇立てる口実を見つけたと言わんばかりに、男は目に嗜虐の色を浮かべた。生意気を言つた罰だと、尻肉を打つ。パシンと小気味よい音とともに、豊満なヒップが衝撃に波打つ。「ひいッ！」

マミゾウは息を飲みながら、逃れるように尻を振る。その様はまるで、さらなる被虐をねだつてゐるかのようだ。男達にもそう見えたのだろう、誘つてんのかよと囁き立てる。「どうです。分かりやすい証拠でしたでしょ？」

「違う、あんなのは……」

マミゾウとて、反抗心を抱き、男共をぎろりと睨み付けてゐるつもりなのだろう。全くできていなかつた。垂れ下がつた眉尻に目尻、蕩けた瞳、恍惚に半開きになつた唇、赤く染まつた頬。色事を好む藍は、それがどのような顔かよく知つてゐる。メスの顔だ。

毛嫌いする女の淫蕩なる表情に、藍は見入つてしまふ。はつ、はつと、呼吸が浅くなる。無防備な彼女の乳房を、布屋はやわやわと揉みしだく。内ももから膝にかけては、何かを堪えるように擦り合はれていた。

「よおし。それじゃあいよいよコイツらを、お前らの慰安のためにくれてやるとしよう」

「うおおおおおおおおおおおおおお！」

塩屋が宣言すると、室内は歓声で湧く。興奮は尋常のものではなく、指笛が鳴り、床がだんだんと踏みならされた。八雲藍に、二ッ岩マミヅウ。幻想郷でも有数の美女を好きにできるとなれば、昂ぶるのは当然のことだった。とはいえそれも、彼が手を振ると静まる。「この女どもを自由にできるのは今夜一晩限りだ。だが、お前らに野放図にやらせると、いつまで経っても終わらんし、お前らが公平に楽しめるとは思えん。私と布屋の主人は、お前たちの上司として、お前らが平等にこの女どもを楽しめるようにしなくてはならん。それが福利厚生というものだ。分かるな？」

にんまりと笑うが、ごろつき共はきよとんとしている。三十文字以上の文章を理解する脳味噌はついていないし、フクリコーセーなるむずかしい言葉は語彙になかった。彼らが分かるのはフグリとシャセーだ。気まずくなつたか、咳払いして塩屋は続ける。

「そこでこうしよう。最初の余興として、ひとりあたま三十秒ずつ、この女どもを自由にしていい。ただしハメるのは禁止だ。それ以外は好きにしろ。もしお前達が一回たりともこの女どもをイカせられなければ、この会はお開きだ。女一匹イカせられないような連中に、この雌どもの極上のボディは勿体なすぎるからな」

「立つてただけでマンコ濡らす雌豚相手に三十秒？ 半分でもいいくらいだぜ！」

目の前のご馳走をお預けされたも同然だが、意外にも男共から不平不満があがることはなかつた。むしろ、目は野望に燃えていた。自分の番でひいひい鳴かせて、みつともなくイき狂わせてやるのだとでも思つてゐるに違ひなかつた。

塩屋が律儀に順番決めをしてゐる間、布屋が話しかけてくる。

「今のは聞いたでしよう、八雲殿に二ッ岩殿？　お二人が耐えれば、今夜の輪姦パーティはお開きです。もちろん、高名なる妖獸のお二方ですから、きっと堪えられるでしよう。ただし、下衆のチンポで次から次にハメ倒されなければ、惨めにイき散らしていただいて結構。その場合は、この連中にたっぷり可愛がつてもらえることでしょうな？」

結果はどうなるかは見え透いていると言わんばかりだつた。言つていろ、と内心嘲笑う。こいつらは、八雲藍といふ妖怪を甘く見てゐる。かつては傾城傾国として鳴らした身だ。そんじよそこらの男のセックステクニックに屈するようで、その称号は得られないのだ。ルールも、あまりにもチヨロい。触れるのは一人ずつで、三十秒という制限時間つき。ごろつきどもは合計で三十余いるようだが、乗算してもたつた十五分堪えるだけで済む。勝ちは目に見えていた。あまりにも楽勝だ。今も全身に回り、肌を紅潮させる媚薬が懸念材料だが——大勢に影響はしないはずだ。

「分かつてゐるな、二ッ岩の」

自分は堪えられるだろうが、問題はこの雌猿だつた。小声で呼びかける。

このお間抜け猿のことだ、薬による欲情にうつかり負けるかもしれない。別にコイツがこつぴどく輪姦されたところで同情はしない。だが、ごろつきに嬲られて惨めに絶頂するなど、妖獸全体の沾券に関わる。妖獸の地位のためにも、堪えてもらわねばならないのだ。

「分かつておるわい。おぬしこそ簡単に気をやるでないぞ？」

挑発的な視線だった。誰にものを言つてているのだと、軽く胸を反らせた。たわわな乳房が小さく揺れる。

「よし。お前達、用意はいいな。もう一度言うが、まだハメるんじゃないぞ」

「お二方。分かつておられるとは思いますが、この連中のすることを拒まないようお願ひしますぞ。お二人に本気で抵抗されば、ゲームが成立しなくなりますからな」

布屋の言葉に、片唇を吊り上げる形で返答した。マミゾウといい彼といい、相手が誰か分かつていないらしい。傾城傾国とは、ちょっとセックスに強い程度で得られる称号ではない。こんな馬の骨共、百人束になつたところで、何の問題もない。

「では始め！」

「ヒヒッ！ 俺が一番乗りだア！」

下卑た連中の中から一人ずつ進み出て、二人にそれぞれ襲いかかる。

「そおら、まずはその無駄にでつけえ乳から楽しませてもらおうか！ ヨガリすぎて泣き入れるんじやねえぞ!!」

「はは、泣かされるのはどちらかな」

一瞬たりとも無駄にしてなるものかというように、男は藍の肢体に張り付く。スリングショットを乱暴にずらし、隠れていた乳首を露出させる。

やや丸みを帯びた乳頭は、これでもかというほど充血してぴいんと尖っていた。そこに男は吸いつき、れろれろと舐め回してくる。

「ぢゅるううッ、れろおッ、ぢゅぶッ、ぢゅるるるるるる」

「イツ……！」

途端、思わず奥歯を食いしばった。

およそ愛撫ともいえない舌使いだ。触れたい、嬲りたい、弄びたいという欲求ばかりが先行しており、技巧などまるでない。非常に乱暴で、極めて雑な行為だ。ゼロ点どころかマイナスで、普段なら絶対に感じない。

どうせこのレベルの奴しかいないのだから、薬の影響を加味しても、十分堪えられると考えていた。見通しが甘かつたと言わざるをえない。極度の興奮にある肉体が伝えてくる性快楽信号は、想像を遙かに上回っていた。

馬鹿など内心で驚愕しながらも、漏らすことはしなかつた。漏らせばこいつらは、確實に調子に乗るだろうから。無反応を装つて、興ざめさせるに越したことはないのだ。

「おいおい何モリアクションねえぞ！」

「ヘツタクソなんじやねえかお前!？」

「ムグッ、うるつせえ！ まだ始まつたとこだろが、黙つて見てろ！ オイコラ狐女よお、この俺が弄つてやつてんだから本気で感じろつてんだ、ええ!？」

彼女の狙いは、むしろ逆効果だつた。ろくな反応を示さない藍を見て、ギャラリードもはやんやと囁く。男は無駄に高い自尊心を刺激されたらしく、激昂する。

「クソ女が、心の底からアンアン喘ぐまでヤツてやるからなあ……！」

「ツ……！」

片手で、右乳房を驚づかみにしてくる。弾力ある乳肉が、指の圧力によつて柔軟に形を変える。指が沈み込む様は、卑猥という言葉では済まないものだつた。

唇を強く噛みしめる。やはり、相手をよがらせることなどろくに考えていない。下手糞とかそういう次元にすら至れていない、乱暴なだけの指使いだ。なのに何故、これほどの性感を覚えてしまうのか。

計画修正だ。余裕だと思つていたが、少し気合いを入れなくては。あくまで少しだけだ。

傾城傾国たる八雲藍が、まさかこんなバカバカしい勝負に、全力を出す必要などない。

「むふううツ、ぢゅるツ、ぢゅぱツ、れろおツぢゅるぢゅるぢゅるツ、れろろツ」

「くふう、ツ、ふ、くつ」

男はぢゅぱぢゅぱと音を立てて乳房を吸い上げ、揉みしだいてくる。走る性感に、膝がぶるりと震える。よくない傾向だ。だがそろそろ、十秒は経つたろう。あと二十秒堪えれば、良い。交代の瞬間に、一瞬のインターバルが生じる。そのときにクールダウンできるはずだ。塩屋に視線を向ける。彼がカウントを担当しているはずだった。

「さああああああアアアアあああああああ、ん」

「おい、ふざけるな!?」

思わず怒鳴りつける。何が三だ、何が。

「よおおおおおおおおおオオオ～おおおおおお、ん」

一つ数える間に、明らかに五秒くらいは経っている。歯がみする。カウントが恣意的に行われるのであれば、制限時間もへつたくれもない。全く公平な勝負ではない。この一夜が明けたらどうしてくれようかと、怒りが湧いてくる。

だが、怒りはすぐにどろどろに崩れることとなる。

「お澄まし顔してんじやねえよ、乳だけで許してもらえると思つてんじやねえぞ雌狐が！」

「つアアツ！」

男の左手が、藍の下半身へ向かう。スリングショットにぎりぎり隠された、秘めやかな
る裂け目へ。布地の上から、中指と人差し指で擦り上げてくる。

「おおッ！ 聞いたか今のは声！」

「エロい声しやがつてよお！ オイ田吾作！ もつとソイツ鳴かせろよ！」

「うつせー言われなくともヨガらせまくつてやるつての！」

がくんと、背筋を反らせる。初めて見せた反応に、ギャラリーは色めき立つ。男も大変
やる気を出したらしく、瞳に嗜虐的な色を浮かべる。

——なんだ今のは？！

対する藍は、困惑していた。されたことといつたら、布越しに雑に擦られただけ。当然
愛撫と呼べる域ではなく、机の角にでも擦りつけたほうがマシなくらいだつた。

だというのに、走った快感は、今まで彼女が味わつた中でもトップクラスだつた。
あの薬は、一体どれだけ強力だつたのか。今さらながら恐ろしくなつてくる。これで、
直接触れられたりしたら。まして中に指をねじ込まれたりしたら、一体どうなるのか。
身震いする。悪いことに、想像はすぐさま現実となつた。スリングショットの内側に、
ごろつきの手が潜り込んだのだ。

「あああッ！」

「うひょ！ あつたけえ！ ヌルヌルだ！」

「ごろつきの指が、すっかり濡れきった陰唇に触れる。またしても背筋を反らせてしまい、男達に囁し立てられる。」

「この、やめろ、やめッ、アツ、ひツ、くうツ！」

「やめろって!? やめられつかこんなモン！ アンアンヨガつといて何抜かしてやがんだこの淫乱がよお！ この勝負はなア、お前がいくまで、終わりやしねえんだよ！」

「ひいッ！ この、馬の骨ごときがあつ……！」

ヌチヌチヌチヌチと、ねつとりとした卑猥な音が室内に響く。執拗なまでの膣口愛撫だ。藍は膝を力くつかせながら、たつぶりした腰を逃げるようにくねらせる。

もちろん、許されるはずもない。咎めるように、指の動きは激しくなる。

「逃げてんじやねえぞ、ドエロく腰くねらせやがつてよお、それとも、そんなに俺の指がイイのか、いつイつてもいいんだぜ、ええ!? ホレ、イケ！ イケ！」

調子に乗った彼は、藍の体内に侵入してくる。

極上の美体とはまったく不釣り合いなごろつきが、大胆にも彼女の膣内を弄んでいる。がしがしと、本来ならば性感など生じない乱暴な手つきで、デリケートな粘膜をこねくり

回す。人間の屑のような輩の指が、襞をめくり、粘膜を擦り上げる。

「くひッ、あ、ツ、んんんんんッ！」は、あツ、あ、やめ、やめろ、お、ああんっ！」

それだけで彼女は、目尻から涙をこぼしてしまいそうなほどの快感に襲われる。全身、快樂でもみくちやにされているようだつた。

もはや外聞を保つていてことすらできない。膝を無様にガクガクと震わせ、愛蜜をぶしぶしとまき散らしては、板張りの床に染みをつくる有様だつた。腰碎けとは、まさにこのことだらう。

「どうだあお前ら、俺にかかればザツとこんなもんだつての！ オライけよ狐が！」

「オイ人間様の命令だぞケモノ風情がよお、素直にイケつつうの！」

「イケつ！ イケつ！ イケつ……！」

室内は最早、異様な興奮の坩堝と化している。快樂でまともにものを考えられない頭に、囁し立てる言葉が叩きつけられる。

本当にイかなくてはならないのでは、と、脳が錯覚してしまいそうになる。イかない、私はイかないと、心の中で強く念じなければ、あつという間に達していただろう。その念すらも、イきたい、イきたいという本能の叫びに、屈服してしまいそうだつた。

「この、くつ、そお……ツ！」

遙々として進まないふざけたカウンントに絶望しつつ、隣の狸に目をやる。せめてお前は平氣でいるんだろうなという、一縷の望みをかけて。望みはすぐさま絶たれた。

「ぢゅるうツ、ぢゅるツ、れろツ、ぐちゅツ、ぐぶつぐぶつ、れろれろれろツ」

「んううう！ くふツ、んふツ、んひいんツ！ んんツ、おつ、ンツ、むく、ンウウ！」

マミゾウを責める男は、彼女の後ろにぴつたりと張り付いていた。まさに密着、という言葉が相応しい様だ。彼女の首を己の方へ向かせ、むつちりした唇を容赦なく吸つてている。ぢゅるぢゅると、繋がありあつた唇から水音が響いている。ぢゅぼぢゅぼと舌をしゃぶりたてている。頬が蠢いている様からするに、相当激しいディープキスだ。口端から溢れた二人分の唾液が、透明な筋を描いて滴つてている。喉の奥から甘えるような、悲鳴のような、くぐもつた嬌声が漏れている。

「うツ、は」

思わず、息を飲む。いくかイかないかの瀬戸際で眺めるには、刺激的すぎる光景だった。

「んくううツ……！ ひツ！ ンツ、ふ、くふうんつ、んう、ひいん！」

それだけではなかつた。彼の両手は、マミゾウのたわわ極まる乳肉の先端を、それぞれ執拗に責め立てていた。

乳輪をきゅうつ、と摘まみ上げ、もちもちとこねくつている。乳頭が隠れた密やかな穴に指の先端を差し込み、ほじくり回している。

普段隠れている分、乳首は刺激に不慣れで敏感に違いない。そんな弱点をよりによつて今責められ生じる快感がどれほどのものか、藍には想像もできなかつた。

さらに、ぱん、ぱんという乾いた音を、彼女は耳にする。男が腰を振りたくつて、尻肉に己の下腹を打ち付けている。肉と肉のぶつかる、ある種のピストンサウンドだつた。

まさか、もう挿入したのか。官能にうねる膣肉を肉棒がほじくり返しているのか？ 答えは否だ。ハメるなと、塩屋はルールを定めている。里でも随一の権力者である彼の言いつけに逆らえば、村八分どころの騒ぎではすまない。彼らのような脛に傷持つ連中は、媚びる相手に嫌われると本当に生きていけなくなる。

だから、無視して挿入した、というわけではない。多分、本当に、腰を打ち付けているだけだ。素股ですらなく、尻に下腹をぶつけているだけ。

本来ならば興奮のコの字も生じない、ごっこ遊びのようなものだ。だが状況が、それをあまりにも凶悪な行為に仕立て上げていた。

今の二人は、媚薬に狂い、性感に惑い、肉体がエクスタシーを求めている。そんな状態では、ごっこ遊びですら、本当に性交しているような錯覚に陥るのも無理のない話だ。

「んうツ！ ンツ、くふううツ、んううツ、おツ、くふう、くひいツ、おおおんツ」
 傍から見ている藍ですら、一瞬そのように感じさせられたのだ。当事者たるマミゾウが
 ののように感じているかなどは、考えるまでもない。彼の疑似ピストンに合わせるように、
 たっぷりとした腰を卑猥にくねらせ、腿をぶるぶると震わせている。本気でセックスして
 いるのだと、すっかり勘違いしているに違ひなかつた。

で、こんな状況で本気でセックスなどすれば、どうなるかは明らかだ。声はまるで崖に
 追い詰められるように、どんどんと余裕をなくしていく。そうしてとうとう、飛び降りる
 こととなつた。

「にじゅうううううううううううううううううううう、に」
 「んお、ひツ、んうう、くふツ——ンフおおおおおおおおんツ！」

繋がりあう唇の奥から、牛のいななくような低い声が漏れた。マミゾウの豊体が痙攣し、
 掌に余るほどの乳房が、腹肉が、尻肉がぶるんぶるんと震える。秘唇からはぶしいつと、
 濃密な愛液がしぶき、板床を激しく濡らす。反る背筋が、エクスタシーの何よりの証拠だ。
 誰がどう見ても、達した。

三十人の愛撫に堪える勝負の、たつた一人目で、佐渡の大猩がイかされてしまつたのだ。
 「ぶツはあ——どうだよオ雌猿が。天にも昇る心地つてヤツだつたろお？」

「くはあ、くひツ、ふざけ、儂が、この儂が、こんな、あ、ああ」

「生意氣言うなつての、お前はイツたんだよ、三十人堪えりや勝ちの勝負の、一人目で」「んくうううツ……！」

相手の男が唇を離し、勝ち誇った顔を浮かべる。対するマミゾウは、だらしなく惚けた顔つきになつていた。彼女の部下が見れば一発で求心力を失う、卑猥な雌そのものの表情だ。そんな顔を浮かべるようなことをされてなお、反抗する。それも、現実を思い知らせてやるとでもいうように陰部を弄られて、一瞬でくじけた。

「ひやつはつは！ あの二ッ岩の大狸がみつともなくイキちらかしやがつたぜえ！」

「見たかよあのブツサイクなイキ顔！ 工口過ぎて見ただけで射精するところだぜ！」

「それにあの汚ねー喘ぎ声！ 牛かなんかの妖怪なんじゃねえの!? ギヤははは！」

「次はお前だぜ八雲藍！ そら、さつさとイカせろよ田吾作ウ！」

「うつせーうつせー、わかつてんだよオ！」

男達は湧きに湧いていた。歓声のやかましさたるや、脳味噌がぐらぐらと揺れるほどだ。それで俄然燃えるのは、藍を責め立てる男だ。いつそう指使いを激しくしてくる。赤子でもしないほどにぢゅるぢゅると乳首を吸い上げ、つねるような勢いで乳房をもみ上げる。さつさとイケよと言わんばかりに、クリトリスを親指で揉み潰し、膣粘膜を中指と人差し

指でぢゅぼぢゅぼと虐げてくる。

「にじゅうううううううう、なな」

「オラオラオラ、早くいけってんだ、なんでいかねーんだお前はア……！」

「ツ、ふツ、はひツ、やめ、やめろ、イ、誰がいくか、ツ、お！　ひ、あ、あ、ああ！」
男はもはや躍起だ。なにせもう片方が、相手を見事に絶頂せしめたのだ。これで己だけ
しくじれば、男としての沾券に関わるとでも考えているのだろう。

暴走する機関車のように、指使いは激しくなっていく。全身を駆け巡るエクスタシーは、
藍でさえも堪えがたいものだつた。歯の根がかみ合わなくなるほどに。

イケイケイケと男はしつこく繰り返す。耳元で流し込み続ければ、命令を聞くはずだと
でも言うように。世界がぐるんぐるん回転しているように感じる。

なぜこんなに我慢しているんだろうと、疑念がわき上がる。受け入れたら、楽になれる
のに。聞き入れてはならないと、首を振つて否定する。一瞬でも耳を貸せば、あつといふ
間に転げ落ちる——あるいは高みに登ることになるだろう。

「にじゅうううううううううううう、はああああああああああああ、ちつ」
「うああツ、はひいツ、あうツ、あ、くツ、ふツ、ふざけえ、ああツ、あああああんツ」
塩屋のカウントは、ここにきてさらに遅くなる。ワンカウントあたり十秒くらいはある。

もはや、ふざけるなど怒鳴りつけることもできなかつた。なにか言おうとするたび、悲鳴じみた甘つたるい嬌声に化けてしまう。

「にじゅうううううううううううううううううううううううううううううううううううううう、
きゅうう」

「あーくそやべえ、やべえやべえ時間ねえ、イケツての、イケツつうんだよオ！」

「あッ、アッ、アッ、早く、はやく、はやく、はやくううう……！」

もう身体がいうことをきかない。全身は跳ねて、脚などまるで力が入らない。フックで吊り下げられていなければ、とつくな崩れ落ちている。けれども、あとワンカウントだ。あとワンカウントだけ堪えればいい。

過ぎた快樂に目尻から涙が溢れている。顔はくしゃくしゃに歪んでいる。化粧が崩れてしまうが、それどころではなかつた。はやくはやくと、うわごとのように唇から漏れる。その続きをどんな言葉がくるか、藍自身ですら分からぬ。はやく終わってくれなのか、それとも、はやくイきたいなのか。

「三十六ッ！ 終わりだ終わり！ さっさと離れろ！」

「ぶはははは！ あいつ結局しくじりやがつた！」

「なつさけねエやつ！ キンタマついてねえんじやねえの!?」

「ツかあ！ なんなんだよクソがあ！」

塩屋が、力強く終了を宣言する。男達が、雄叫びのような歓声をあげる。ほとんどは、藍を絶頂させられなかつた男へのヤジのようだつた。やかましすぎてろくに聞き取れないし、そうする必要も余力も、どこにもなかつた。

終わつた――。

「ツ、は、あ、ああ」

全身から力が抜ける。身体中に珠の汗を浮かべ、涎や涙や愛液にまみれた姿は、一時間近くも行為を続けていたかのようだ。そのたつた一二〇分の一しか経過していないのに。男は思い切り藍を睨み付けるが、それに反応する余裕も今の彼女にはない。ずかずかと床を踏みながら離れていく様を、肩で呼吸をしながら眺めることしかできなかつた。

「いやあ、よくぞ堪えきりましたね八雲殿、素晴らしい」

布屋がニヤニヤと笑いながら語りかけてくる。まあもう次で終わりだろうがなと、目は思い切り嘲笑つている。

「それに比べてあの狸の、なんとまあ情けないことか、見えますかアレが。佐渡の二ツ岩でございと偉ぶつてみたところで、所詮はマンコなんですなあ」

マミゾウに視線が向く。性感に思考を奪われているらしく、彼女はすっかり虚ろな瞳に

なつていた。ときおりびくん、びくんと震えているのは、オーガズムの余韻がいまだ身体を支配しているからに違いない。スリングショットはすっかりズレ、秘められるべき部位を露わにしている。陰毛は蜜に濡れててらてらと輝き、秘貝は濃厚な雌汁を涎のように、とろとろととめどなく垂れ流していた。

勝負が始まる前の藍なら、誇り高い妖獣が情けないことだと見下していたことだろう。だが今は、その姿に絶望的な不安と戦慄を覚える。自分は一応、非常に癪ではあるものの、あの狸女を、自分と同格と認めている。

その狸女が、あんな風になつてしまふのだ。

勝負が終わるまで、あと二十九人。自分もああならずにいられる気がしない。

「さて、あまり連中を待たせるのも悪いですから、早速二人目といきましょうか。ああ、二ッ岩殿ももちろん参加いただきますからな」

「……待て、どういうことじや、儂はもうその、イッたろうが。終わりでいいじやろ!?」

布屋の言葉に、虚ろだったマミゾウの瞳に意思の色が戻る。驚愕と恐怖が浮かんでいた。それに答えるのは、塩屋だ。嘲りを込めて、平然と言い放つ。

「はん。イッたらゲーム終了とは一言も言つてないだろうが。妖怪狸というのは記憶力が弱いと見える。そもそもこれは、我々の部下に対する慰安だ。主役はこいつらなんだから、

お前ら雌穴がどうなろうと、全員が一巡するまで続々に決まつてゐるだろう、間抜けめ」「んな……」

絶句するマミヅウ。藍もだつた。

絶頂しても終わらない？ では二十九人に、ひたすライかされつづけろということか。あの不公平な“三十秒”カウントのもとで？

そんなのは、幻想郷最強の妖獸二体であつても、堪えがたいことだつた。「ちょ、ちょっと待て、今なら何もなかつたことにする。紫様にかけあつて、里の商売に便宜を図つてやつてもいいから」

「しゃつ、舍弟の狸どもを貸し出すぞ？ 化け術が使えるのは有利じやぞ、およそ大概の策謀はこなせるからの、どうじや」

「はん、ケモノの言葉は分からんなあ。おい、用意はいいな？ はじめ！」

戦慄する二人をよそに、ごろつき共がにじり寄る。待つてと頼む暇もなく、開始の合図がかけられた。

「よお、さつきの田吾作相手じやイケなくて寂しかつたろ？ すぐにこの泣き虫マンコを、たあああああつぱり幸せにしてやるからなあ！」

「け、結構だ、私はさつきのでもう十分、ムムウツ」

とつさに身を引こうとするが、腕を吊されていてはどうにもならない。アツという間に張り付かれてしまった。

二人目の男は意地の悪い笑みを浮かべると、何か言う暇すら与えず、唇を奪つてくる。逆らうことなどできず、接吻を許してしまった。

「ぢゅるるッ、れろッ、ぢゅぱッ、ぢゅるうッ、れろッ、れろおお」

「ンくううッ、ふッ、んううッ、く、んううウ、ふッ、ん、くふう」

ねつとりとした舌が、口内粘膜を嬲り回してくる。歯の隙間まで、全て蹂躪してやるといわんばかりに。さらに彼は、藍の股座に手を伸ばす。乱れ盛大にズレたままのスリングショットは、陰唇を隠しもせず、剥き出しにしている。その思い切り曝け出された秘貝への遠慮もなしに指を潜り込ませてくる。

「くふううッ!? ヌツ、くうツ、おツ、んうツ、ふツ、んうう！」

中指と人差し指を協調させながら、嬲るように恥肉をこねくつてくる。濡れそぼつた、という言葉でも足りないほどに解れた淫貝は、大した抵抗もなく異物を受け入れ、悦び、きゅうきゅうと締め付ける。陰核を親指で転がされても、感じずにはいられない。こいつ、巧い。

いや、技術の巧拙でいつたら、過去に相手してきた男の中でもせいぜい中の上くらいだ。

しかし、一人目の男とは違い、感じさせようという意思を行為から感じる。泣き虫マンコを幸せにしてやるという言葉に、嘘偽りはないのだろう。

言い換えるなら、一人目の行為は勢い任せの虐待に近かつたが、今度のは真っ当な愛撫、ということだ。その虐待にすら、絶頂寸前まで感じさせられた。ちゃんと愛撫されたら、一体どうなるか、考えるまでもなかつた。

「ンッ」

あつヤバいと、本能的に感じた。そのヤとバのだいたい真ん中あたりで、快楽の波が藍を押し流した。

「くっ、くひいいいいいいツ……！」

喉の奥から、引きつったような、甘つたるい声があふれた。理知的で狡猾な大妖怪たる八雲藍があげるとは、とても思えない媚声だ。

同時に、彼女の背筋が、海老のようにぐいんと反り返る。身体が痙攣するたび柔らかな乳房ががくがくと揺れ、汗が珠となり散る。秘唇からは濃厚な雌汁が音を立てて噴き出し、彼女がどうなつたかを端的に示した。

食事、排泄、睡眠にと、およそ原始的な欲求は、我慢すればするほど、満たされたとき気持ちがよくなる。性快楽などは、例としてあげるまでもない。そして藍は、先の三十秒

——と称した名の数分間——にて、焦らしに焦らされてきた。結果生じるオーガズムは、彼女の思考を押し潰し、快楽の荒波に放り込んだ。

今、彼女は、荒れ狂う官能の海に放り出された一隻の小舟だ。当然、一瞬で転覆した。

「はああああああああああああ、ち」

「ンフウウツ、んうつ、くふうう、ぷは、ああつ、ああああつ」

「ぶは、へへ、まだヨガるのはちょっと早いぜおい」

大した絶頂だったが、まだカウントは続いている。彼は唇を解放し、彼女の元に屈む。あろうことか、未だアクメから下りられずにいる淫裂に、思い切り吸い付いた。

「ぢゅるううツ、れろつ、れろれろれろつ、ぢゅるううつ、ぢゅつ」

「アアアア！ やめつ、やめろ、おんつ、ああ、くひいいツ！」

無防備に曝け出されたピンクの粘膜に、彼はぢゅるぢゅると音を立てながら舌を這わせ、オンナの最大の弱点を熱烈なクンニリングスで蹂躪する。その妖しくも甚だしい快楽に、藍は狂つたようによがることしかできない。

「ふううううツ、ううつ、んんう、くふうう」

「つははあ、いやあ、こんだけ感じてくれたらやりがいあるねえ、あっちも見て見ろよ、お仲間がアンアン感じまくつてることをよ」

「ヂュルルウツ、れろれろつ、ずぞつ、ぢゅるうう」

「やめつ、やめんかこの、おおんつ！ ヒツ、あくううツ、もうつ、もうゆるしつ」「はん、まだ二人目なのに鳴きいれてんじやねえよお、つつか狸だけあつてクソ毛深いな、口にマン毛が入つてくるんだよオイ！ ペッペッ！」

「そんなの、儂のせいじや、ああああツ！」

快樂に白熱する視界の端で、マミゾウも同様にクンニされ悶えて いるのが見える。自由になつた唇が、けたたましいほどの嬌声を垂れ流しに している。

「そらそら、まだまだ続くぜえ、ぢゅつ、ぢゅるううう」

「れろつ、ぐちゅ、ヂュブツ、ぐちゅツ、れろおおおお」

「あひいいツ！ んはあつ、あうつ、くひ、ひいんつ、あああ！」

「おふうつ、くふ、やめ、ゆるひつ、はあああツ、んおおんつ！」

弱点を舐め回され ては身体をくねらせ、浮かぶ汗を珠のよう に散らしては乳房を揺らす。腰はくねり、脚は痙攣し、ヒールが床をカツカツと鳴らす。

そこにいるのは八雲と二ツ岩の大妖怪ではなかつた。秘部を舐め回され てはしたなく蜜をまき散らす、卑猥な雌獸二匹だつた。

「濡らしすぎだろ、顔が汚れんだよ、無駄に毛深いしょお！」

「ツひい！ あう、おつ、おおおツ！」

ぱしんと、良い音が響いた尻肉を叩かれる。丸く白いヒップに、赤く掌の痕がうつすら残る。叩かれることすら、今の彼女には快感として感じられた。その反応を面白がったか、二度、三度と掌が繰り出される。追い詰められたような嬌声を漏らしては、されるがままに感じることしかできなかつた。

——そこからはもう、何が起きているのか、ろくに認識もできなかつた。何人もの男が入れ替わり立ち替わり、藍を、マミゾウを弄んでいく。

「ヒいつ、イクつ、イクう、イクイクイクイクうううんツ」

「あおツ、ひい、おくうつ、おつおつ、おおおおおんつ」

口づけされて達し、カラダを撫で回されて達し、乳房を揉まれて達し、吸われて達する。つねられて達し、叩かれて達し、陰核をこねられて達し、膣穴を舐められて達した挙げ句、指をねじ込まれて達する。アクメ、アクメ、アクメ、オーガズム、おまけに、アクメだ。

尻肉も散々躾けられたし、どこまでも卑猥な尻たぶを割り開かれては、その奥に隠れていた背徳の穴をほじくられる。本来痛みしか感じないはずの菊門愛撫にすら、二人揃つてみつともなく絶頂してしまう。変わり種では、三十秒かけて脚だけ舐め回す妙な性嗜好の輩もいたが、そんな行為ですらオーガズムに至つてしまふ。

「許してえつ、ああつ、もう、もう堪忍してえつ」

「ひい いつ、おお、無理、無理じやから、あああ」

「へへへ、あの幻想郷の二大妖獸どもがよお」

「みつともなくヒンヒン鳴いてイきまくつてやがる！ 所詮メスはメスつてこつた！」

もう目の前の男が何人目なのか、あと何人相手しなければいけないのかも分からぬ。

全身は汗でぐつしょりと濡れて、照明を反射して煌めく。舐められまくり唾液にまみれた乳首は痛いほど勃起しており、じんじんと甘い官能を伝えてくる。

股座のはしたない有様についてはもはや言うまでもないし、陰核はぶつくり膨れ上がり自己主張している。スパンキングされてきた尻肉は、日光の猿のように赤く染まっていた。

「くつ、はつ、はあ、あう、ツくう」

「ひい、ひい、ひい、くはああああ」

三十秒と三十秒の間の、僅かに与えられるインターバルの間も、ぐつたりとして呼吸を整えることしかできない。腰も膝も碎けて既に機能していない。フックで吊り上げられていなければ、床に崩れていただろう。

マミゾウも、似たような状態であるようだつた。くせつ毛の髪は額に張り付いており、頬は林檎のように赤らんでいる。散々吸われ豊満なる乳房は、唾液にまみれ、ぬらぬらと

輝いている。恥ずかしがりの先端にはとっくにほじくり出され、ぴいんと勃起していた。普段埋もれている乳頭にしてみれば、外気に触ることすらも快感なのだろう。ときおりぶるりと身体を震わせているのは、そのせいに違いない。

横向きに走る臍には汗が溜まつており、きらりと輝いている。ふさふさと茂った陰毛は愛液を蓄えて、濃厚極まる雌臭をムンムンと漂わせていた。

「へへッ、メスくせー」

誰かの呟きを明かし立てるように、二人揃つて、ヴァギナから淫汁を溢れさせている。足下の床には染みどころか、水たまりができていた。乾いたとしても、染みついた淫臭は取れないだろう。

「二九、三十、そら次だ、さつさとしろ」

退屈になつてきたのか、塩屋の言葉は淡々としてきている。ごろつきどもは全く飽きていない。まだ終わらないのかと、すっかりくじけた心が弱音を吐く。

「おいおいおいおい雌狐よお。このクソアマ、さんつ……ざん、喘ぎヨガリ倒しやがつて、ええ？ 何のつもりなんだてめえは、オイ」

目の前に、また新たな男が立つ。うなだれていた藍だが、尋常でない声色に顔を上げる。なんというか、とんでもない怒気を浮かべている。

何事かと思い、目をすがめ、男を観察する。どことなく見覚えがある。というか、最初に相手をさせられた、あのひたすら乱暴な指使いの男だ。

今のところ唯一、藍を絶頂させられていない男もある。

「ま——待て、覚えているぞ、お前は二回目だろうが!?」

三十人が一巡するまで堪えるのが、勝負のルールのはずだ。二度も三度も挑戦してよいなら、ゲームが崩壊する。当然の指摘だが、彼はそれを踏みにじる。

「ハアアアン!? 知らねえなあ、俺はまだお前になんもしてねえよ。いやあさつさと弄り倒したくてしようがねえなアー！ ねえ旦那、そうでしようが!?」

塩屋に視線が向けられる。男はにんまりと笑った。笑顔というのは本来、ポジティブなものであるはずだが、彼の笑顔はひたすら邪悪だ。

「もちろんだとも。お前は確か、三人目だつたかな？」 というわけで、あと二十七人ぶん、

頑張ることだな、雌狐』

「ふざつ、ふざけるなツ、話が違——んはあんツ！」

驚き呆れるとは、このことだろう。だが、それ以上の反論は許されなかつた。反論する暇もなく貪りつかれたせ이다。

乳房に吸い付かれ、揉みしだかれ、陰唇を嬲られる。あがる声は、明らかな官能の色を

浮かべていた。軽く絶頂を迎えていた。

「どうしたどうした、最初のクソ生意気な態度はどこに行つたんだよオ。え？ 唇噛んで堪えてた根性はどこ行つた雌豚がア、とんだチヨロマンだなあお前はよオ！」

「くひツ、あ、はあツ、おおツ、ちがう、コレはツ、あ、ああ！」

「なあにが違うんだつつうの、違うつつうんなら十秒でいいから堪えてみろや！」

男がやかましく煽り立ててくる。その手つきは相変わらず乱暴きわまりなかつたが、藍は簡単に乱されてしまう。仕方ないではないか。一番はじめの、意地でも堪えようとしていたころとは違うのだから。

性感というのは、ちょうどダムと同じだ。一度決壊してしまつたら、もう抑えられない。

「そおら、ヌレヌレマンコに布が食い込んで、エロいなあ、ええ!?」

「はひツ、あふうウ、あおツ、やめ、ああツ、あああ！」

「おつアレいいな、俺もやるか、そら踊れや狸が」

「ああツ！ やめ、やめんか、このような、ああツ、ああ！」

「クイツ、クイツと、スリングショットを引っ張られる。グショグショに濡れそぼつ極細紐は、股縄を這わすように淫貝に食い込む。

そんなのは、刺激としては全く大したことはないはずなのだ。だというのに、二人して、

雌そのものの声をあげ、腰をくねらさずにはいられない。がくがくと身体を震わせながら、よがり狂う。

「ひひ、すげーな、乳ぶるんぶるん揺さぶつてよう」

「極上のストリップショードぜ、いやもうほんと脱いでるしまな板ショードか？ まあ、どつちにしろめちゃくちや工口いのには変わりないな」

触れられるたび、ほじられるたび、甘くも激しい絶頂の波が彼女らを狂わせる。アクメ汁をまき散らしてよがる様を、男らは面白がり、先の鬱憤を晴らすべく責めの手を強める。「あー、まだるつこしいな、俺にも楽しませろよ、なあ？」

「なッ、ちょ、ちょっと待てッ」

仰天する。別の男が後ろに張り付いたからだ。当然のように尻肉を揉まれては、流石に抗議せずにはいられない。

「一人ずつというルールだろう、三十秒経つまで、ああッ、大人しく、ン、してろおつ」「いや、今さら何がルールだよ。二巡目やつてる時点でルールもクソもねえだろ。そおら、イかせまくつてやるから覚悟しろよオ」

「ひいいッ」

男の手が身体を這い始める。塩屋も布屋も、ニタニタと笑うばかりで止めようとしない。

こぼれたのは、恐怖の呻きだった。一人ずつの責めだけでもよがり狂わされているのに、二人以上？ そんなのは、想像することすらできない。

「あはあツ！ アツ、くはあツ、ああ、やめ、ぶちゅううツ、ぢゅるツ、れろツ、ぐちゅ、ふは、ダメ、ダメ、んふうツ！ ああんツ、ああああ！」

けれどもそれも、すぐに嬌声に化けた。唇を奪われ舌を絡まされでは、女としての幸せに満ちた雌声を垂れ流すにはいられない。

「んうツ、おんツ、おうツ、んふううううツ」

尻を揉まれ、指でアヌスをほじられる。三十人相手する間に散々こねられてきた背徳の穴は、淫蜜と腸液に塗れている。ヒクヒク悦びながら、大した抵抗もなく男を受け入れる。「そういうことなら俺もいいよな」

「俺もだ」

「おつ、んじや俺はマミゾウサマに相手していただくとすつかなあ、イヒヒツ！」

「やツ、ああツ、ああああ！ ひウ、おおんツ、おひいいツ！」

「んはああツ、ダメ、やめツ、おおんツ！ あおツ、くひいい！」

赤信号、皆で渡ればなんとやら、である。何人の男達が、俺も俺もと群がつてくる。耳唇首脇乳房に腹に下腹、淫裂、陰核、尻に脚。待つてと言うことも許されず、識別する

のも馬鹿らしくなるほど、全身ありとあらゆる性感帯を嬲られ、快楽を搾り尽くされる。息も絶え絶えといつた様子の二人は、もはや呼吸をするので精一杯だ。

「あはああッ、ゆるして、もう許しつ、ゆるして、ひいツ、ひいいい——ツ」「くはツ、はひツ、ゆるし、ああ、もう、降参じや、かんにんをおツ……」

やがて、どちらからともなく、その言葉が漏れた。

幻想郷最強の妖獣が誰かに許しを請うことなど、普通ならばあり得ない。およそ大妖怪と呼ばれるような存在は、誰も彼も誇り高く高慢で、己が世界で一番と思っているからだ。「ぶツ、ぎやはははは！」おい、聞いたかお前ら!!」

「許して!? 降参!? あの誇り高い八雲藍に二ツ岩マミゾウが、墮ちたもんだなオイ！」

あり得ないことを成し遂げた興奮に、男達は床を踏みならし、口笛を鳴らす。

同時に、彼らの中で、二人の価値がどん底にまで墮ちた。これまでには、なんだかんだで人外への恐怖が視線の奥底には込められていた。それがすっかり消え失せたのだ。

今や、二人へ向けられるそれは、奴隸に向けられるのと同種のものになつていた。

「……ははあ、あの八雲藍に、二ツ岩マミゾウが、ちょっとオマンコを弄られたくらいで許しを請うとは。しょせん雌のケモノですなあ。ちよいと発情させてやれば、アツという間に墮ちる。とんだチョロマンですな、まつたく」

「はヒツ、ひい——ひ、あくううう……」

芝居がかつた声で、布屋が言う。体力の限界まで弄ばれた二人は、なにがちよつとだ、という反論すらできなかつた。

「まあいいでしよう。そういうことなら、このゲームは終わりです」

「な……い、いいのか？ 許して、くれるのか」

またもぐつたりとしていた藍だつたが、その言葉に顔を上げる。瞳には少なからぬ期待が込められていた。この快楽地獄から抜け出せるのかという期待だ。

「もちろん。しかし、だからといってこのまま解放すれば、我々の部下も不満に思うことでしょう。福利厚生のため、もう少しお付き合いいただきますよ、お二人とも」

「あ、ああ、それで構わない……」

「儂もじや、煮るなり焼くなり好きにせい」

彼の顔に浮かんだのは、人を嵌めるのが大好きですといわんばかりの、邪な笑みだつた。もう少しとやらがろくでもないことは、容易に想像がつく。

それでも、このまま絶頂地獄を味わい続けるよりはマシだ。受け入れながら、彼女らは安堵を覚えていた。

「よろしい。ではコレも外すとしましよう。長時間その体勢でいるのは、お辛かつたこと

でしょうなあ?」

男は、ごろつきどもに命じて、二人を吊り上げるフックから手枷を抜き、また枷自体も外させた。立つことすらもままならなかつた二人が姿勢を維持できていたのは、吊られていたおかげだ。当然、床にぐつたりと崩れることになる。

「フン、この程度で情けない。しつけのなつてない雌共だ、まつたく……」

塩屋の罵声が、上から降つてくる。睨み付けるだけの気力もなかつた。それに、下手に敵意を向けて、またあのアクメループを味わわされることを一人して恐れていた。

「まあ、よかろう。次やることを思えば、立てないのは都合がいいくらいだ」

「お二方は散ッ々みつともなく、恥知らずのアクメを好き放題にキメておられましたが、我々の部下達は一度も射精しておりませんでな? しかもお二方がドスケベな姿を晒しに晒しまくつてくれたおかげで、そのキンタマはパンパンどころの騒ぎではございません。お二方に、最低でも三回ずつは種をつけないと、まあ満足できないでしようなあ。まあ、先ほど土下座してまで種付けを乞うたわけですから、構いはしますまい? むしろあまりの嬉しさに、マンコが涎を垂らしているところじやあないんですかね?」

「いや、ちょっと、勘弁してくれ……」

心の底から懇願する。最低三度? 三十秒の愛撫一巡でヘロヘロになつてしまつたのに、

脳味噌まで精子の詰まつたごろつきどものセックスを、三巡？ そんなの、強靭極まる妖獸といつてもどうなるか分からぬ。

「ええもちろん、二人が疲弊していることは承知しておりますとも。ですから、また勝負といきましょう。なに、先の勝負ほどはハードではありませんとも。そうだ、勝った方は真っ直ぐ家まで帰れるとということにしましょう。ただし勿論、負けた方は、一晩中肉穴でこいつらの相手をする。いかがですか？」

「いかが、つて」

「要するに、二人の内一人は助かつて、もう一人は輪姦されるわけです。いいですか、片方は、何もなしになるわけですぞ。ただ相手を蹴落とせば、一切チンポを突っ込まれず済む。いやあ、楽なことだと思いませんか」

咄嗟に、二人の間で視線が交わされ、見えない火花が散る。彼女らの目は告げていた。
——お前が犠牲になれ。

「承知した。先の勝負ほど疲労しないというなら、受け入れよう」

「儂もじや。何もせず帰られるなら、これほどありがたいことはないわい」

二人して頷く。いずれにせよ、受け入れなければ二人揃つて輪姦だ。他に道はなかつた。
「結構。ルールは簡単、時間内により沢山の男を射精させた方の勝ち。制限時間は三十分。

非常に分かりやすいでしょ？　あなたの方の脳味噌でも理解できることでしょ？

瞬間、藍は勝利を確信する。口元がニヤつくのを抑えたくないだ。

先ほどは薬のせいで散々無様を晒したが、かつては傾国の毒婦として鳴らした身である。性技は当然、国一つを傾けるに足るだけのものだ。日本の隅っこで細々と金貸しをやっていたような狸に、負ける道理などない。

——お前に恨みはないが、私のために輪姦ルンガしてくれ。

横でぐつたりしている雌狸を、哀れみと同情を込めて眺める。せいぜい、そのみつともない陥没乳首を、思う存分こねられ乱れさせられるがいい。

「聞いたなお前ら？ 分かったらとつとモノを出せ、お楽しみの時間その一だぞ」「へへ、ようやくお前らにザーメンぶちまけられるつてわけだア」

塩屋に言われるまでもなく、誰も彼も衣服を脱ぎ捨て、一物を晒していた。前後左右、三百六十度、勃起したペニスで二人を囲い込む。

「んはッ、濃つ……」

元々衛生観念に欠けたような連中だ。裸になれば当然、室内に、男の匂いが充满する。二人は妖獸で、敏感な嗅覚をもっている。呼吸するだけで、ごろつきどものペニス臭が肺に満ち、くらくらしてしまいそうだった。官能に散々溺れた脳味噌にはキク。

「よろしいですか？ では用意、始め！」

「んああ、あむうツ——ぢゅるツ、レロツ、ぢゅるるるツ、んふうううツ」

先手必勝。布屋の宣言と、手近な魔羅に藍が吸い付くのとは、ほとんど同時だつた。

舌を突き出しながら、唇で竿の根元までねつとりと包み込む。唾液をたっぷり含ませた口内で、雄臭い茎をれろれろと舐め回していく。

割りと好みの竿だつた。バナナのように沿つた幹や、広く張り出したカリは、頭を前後させるたびに唇を楽しませる。生臭い雄の臭いも、藍にとつては慣れっこだつた。

「うおおおッ！ やツ、やつべ、なんツ、じやこれ、おおおおツ」

男は奇声をあげ腰を震わせる。何も大げさなリアクションではなかつた。こんな下衆が今まで抱いたことのある女といえば、精々色町の風俗嬢ぐらいなものだらう。対する藍は、国一つ揺るがすほどの美女であり、為政者を次々に虜にする性技の持ち主なのだ。先ほどどれだけ調子に乗つていたとしても、未知の快楽の前に、アツという間に手玉に取られて当然といふものだつた。

「ふふふ……——ぢゅるツ、ぢゅぱツ、ずよよツ、れろれろ、くぶ——ぢゅるうう」
追い打ちをかけるように、藍は口淫に熱を込めていく。頬を窄めて吸いつきながら、頭を前後させる。がぼがぼと口端から音が鳴り、唾液が滴つていく。その内では、ヌルつく

舌がれろれろと、肉竿のありとあらゆる部位を的確に舐め回している。

表情はひょっとこのようで、ともすれば間抜けさが出てしまうものだ。しかし、彼女の
ような美貌の持ち主にかかれれば、妖艶さすら醸し出される。

「ふはあ——そおら、こっちはどうだ、んちゅツ、んぶ、れろれろ、ちゅむうう」

「お、お、おウツ、待て待て待て、ソレはやばい、ソレは、おおおおお、ああああ！」

それだけではない。時折肉竿から口を離して、陰毛の密林に顔を埋める。ぢゅるぢゅる
音をたてながら玉をしゃぶり、唾液まみれの竿を白い指先で扱いてやる。女日照りの男は、
アツという間に限界に至る。

「おつ、おおツ、クソが、クソが、雌狐が、なんつちゅう、おおツ、ぬおあああ！」

「んふふツ、ほら射精だしてしまえ、濃くて臭い汁を。そうしたいんだろう……？ あは、
きた、んふ、んううう……！」

元々熱い肉棒が、さらに熱量を増す。灼けた鉄のようになる。それが何を意味するか、
藍は勿論知っている。亀頭を咥え込みながら頬を窄め、人差し指と親指で作った輪で根元
を扱いてやる。とどめとしては十分すぎた。

「ちいつくしうが、オラ、全部飲み干せや雌豚があツ！」

暴言とともに、どくどくと、口内に濁液が解き放たれる。生臭く苦み走った種汁が口腔

を満たしていく。溜まつていたということがよく分かる濃厚さに、藍は目尻を垂れ下げる。

「くうううん……ツ」

例の媚薬に刺激された女の本能が、きゅんきゅんと疼いているのが分かる。先ほどあれだけ嬲られたといふのに、淫貝からとろりと、卑猥な蜜が滴っていた。

「ぢゅるる、ぢゅるう、ぢゅぼッ。……はあ、悪くなかったぞ？ お前」

しばらくそうして種汁を堪能していると、やがてペニスの脈動は収まる。尿道の残滓もしつかり吸い上げ、竿を解放する。唇が栓の抜けるような音をたてた。大量に精を放っただけあって、陰嚢は収縮しており、魔羅も半萎えだ。

口腔を開き、中を見せつける。ピンクの舌に、プリプリした白濁がたっぷりと絡みつく様を。己が知る限り、とびきりの淫らな、オンナそのものの表情を浮かべながら。

「うつわ、なんじやあの顔、やつべ、たまんね、うううツ」

蕩けきつた、雌そのものの顔だ。精通もまだの少年だって、勃起せずにはいられまい。まして彼らのような、女イコールハメるものと考えている連中に対しても、効果できめんだった。ギヤラリーは色めき立ち、ただでさえ反り立っていた魔羅をぎんぎんと滾らせる。目の前の男ですら、半萎えだつたはずのモノが再び天を衝いていた。

縮み込んでいたはずの睾丸は、再び膨れあがり始めている。眼前の雌に再びたっぷりと

射精すべく、精子を急造しているに違ひなかつた。

「んくッ——んぐ、んぐ」

そろそろ良いかと、口を閉じ、呑み込む。普段ならば舌で噛みつぶして、その絡みつくような最低の喉越しを楽しむところだが、今は時間が惜しかつた。あの狸に負けるわけにいかないのだ。

「んふうッ——ぢゅるッ、くぷッ、くぼ。れる、れろれろれろ——んもおん」

「おあ、ッ、やつべ、なんじやこれ、持つて行かれる、もつてイかれるウ！」

視界の端でちらりと見れば、まだ一本目をえつちらおつちらしゃぶりたてているところのようだつた。分厚い唇で魔羅を優しく包み込み、ねつとりした口淫を繰り出している。あんな風にされたら、温かくネットついた口内粘膜でペニスを蕩かされるよう錯覚するだらう。極上の口腔奉仕に、相手の男はすっかり惚けている。

なかなか悪くない性技だ。だが、アレではいかんせん、一人処理するのに時間がかかる。もつと刹那的に射精させねば、八雲藍とは勝負にはならない。勝つたと、内心でほくそ笑む。

「あむううッ——うグウ」

敵情観察もそこそこにせねば。さくつと、手近なモノを咥え込む。途端、口内に強烈な雄臭が広がる。思わず呻いてしまつた。

きちんと洗つていないので、恥垢がべつたりと付着している。普通の女でなら、間違いなく嫌がつただろう。だが藍は、性を極めた淫婦だ。このような魔羅でも、強烈なクセを楽しめるだけの経験を積んでいた。

「んふ——れろれろッ、ちゅる、れるツ、ちゅむツ、ちゅ、んもつ、くぱ、くぼツ」

「うつ、ツ……、つわ、なんだこりや、おツ、お、ううううツ……!」

卑猥なリップノイズをあげまくりながら、口腔でもつて奉仕していく。先ほどのように吸いつくのではなく、むしろ舌での行為に重点を置く。根元から先端まで、竿全体を丁寧に舐め回していく。

特に雁首のあたりなどは、臭いも濃厚で、味覚と嗅覚両方の面で楽しめる。じつくりと舌を這わせて、表面に付着した汚れを舐め取つてやる。タンパク質の塊たるそれらを嚙下すれば、背徳的な官能に子宮がゾクゾクと疼いた。

「うぬうウ、おほおツ、おツ、くはあ、ふおおおお——」

熱心かつ丹念な掃除に、すっかり腑抜けている。あがる声は、雪の日に丸一日外で作業した後に、熱い風呂に浸かったとき出るものに似ている。口から涎が垂れるほどだ。

そのような反応は、セックステクニックに対する何よりの承認といえる。藍の自尊心を、心地よくすぐつた。

「おツ、くそ、出る、雌狸の口に種付けだ、全部呑めよオラア！」

「んく、ング——ぶはある!? あツ、うわ、ああ……」

くぐもつた声が聞こえる。ちらりと様子を窺えば、どうやらマミゾウがようやく一本目の処理を終えたようだつた。

突然の射精に驚きでもしたか、情けないことに口を離したらしい。びゅくりびゅくりと放たれる濁液が、顔面にぶちまけられていく。丸眼鏡にスペルマがべつとり付着した様は、そこはかとなく間抜けであり、淫らでもあつた。

「ちゅるウ——れる、れろ、ツ、ちゅる、くちゅ、ちゅぱ、んも、んうう」

向こうも追いつこうとしているようだが、油断せずに行けば問題はない。冷静に判断し、舌を軟體生物のように蠢かす。鈴口をれろれろろと執拗に責めてやれば、あつという間に男は限界を迎えた。

「ぬあ、ツ、ああああツ——！」

「くふ、んうう……ツ」

どふどふと、またしても濁液が口内に流れ込んでくる。滅茶苦茶にいがらっぽく、舌に刺さるようだ。あまり野菜を摂らないのだろう。食生活は精液の味に如実に反映される。飲み干しにくかつたが、それでも手早く嚥下する。喉に貼り付くような感覚も、慣れれば

好ましいものだ。

「んく、んふう……ぢゅぽツ。お疲れ様、どうだ？ 私の口淫は」

「ア、ハイ、すごくよかつたです、ツス」

ぢゅツ、ぢゅと吸いつきながら、陰茎を解放する。ぶほん、と頬が間抜けに鳴る。強烈極まる射精に毒氣を抜かれたか、男は呆けたようにコクコクと頷くばかりだつた。

これで二本目。おそらく、時間としては五分と経つていい。無茶苦茶なハイペースだ。既に二本目に取りかかっているマミゾウも相当なものだが、今回ばかりは相手が悪かつた。すまんなと内心で勝ち誇りながら、さらにリードを広げにかかる。

「おい、次は俺だッ、さつさとその雌狐で射精してえんだよツ」

「いいや俺だねツ、お前こないだカネ貸してやつたろうがつ」

「ああ!? すぐ返したろうが、つーかうどん一杯で勝ち誇つてんじやねえカスが！ オイ雌狐！ お前の大好きなチンポだぞ、さつさとしゃぶりやがれ！」

男達は藍に群がり、次から次に竿を見せつけてくる。鼻筋に触れそうな勢いだ——いや実際、さつきからちよんちよんと触れている。

なんとも好ましいことだ。乗り気であればあるだけ、射精させるのは容易なのだから。ではいつそう、この口を使いたくてたまらなくなるよう、ペースを上げていくとしよう。

「ぢゅぶうツ」

三本目にしやぶりつく。先の二本に比べればやや短いが、代わりに太く、硬い。特に、カリ首の深さなどは好感がもてる。なかなかの代物だった。

「んつふ……くぱツ、くぼ、ぢゅるうツ、ぢゅぼツ、ぐぶん、ぐぼつ、ぐぶう」

「おつ、オア、これが、うおおツ、ウオオオおつ……！」

くぼくぼと空気の抜ける音を立て、頭を前後させて吸い付いてやる。ようやく味わえた淫婦の口技に、男は狂ったような声をあげながら感じ入っている。

「くつそ、さつさとしやぶらせてやりてえよ」

「だな。あのおすまし顔がザーメンまみれになつてんの想像するだけで勃起するぜ」「ふむ……」

周囲の男は、そんな彼に嫉妬と羨望の目を向けながら、己のモノを扱いている。要は、あぶれているのだ。室内には三十人、二人で分けても十五人もの男がいる。手が足りないのは仕方ない。仕方ないが、それはそれとして、少しでも余りが少なくなるよう、配慮はするべきだろう。藍にとつては、それほど難しいことではなかつた。

「んぱおツ」

眼前の竿から、一旦口を離す。ぎりぎりまで吸い付いていたので、大層卑猥な音が鳴る。

亀頭から唇にかけて、カウパーと唾液の混じった粘液が糸をひく。そのまま、右隣のモノにしゃぶりついた。

「ぶぶウ、ぐぼツ、ぐぶツ、ぢゅるツ、かぶうツ、んふお」

口端からぶぼぶぼと、品のない音が響く。そうして口淫奉仕している間も、先ほどまで相手していたモノを放置しはしない。指を絡め、根元から先端まで、スナップをきかせて扱きあげていく。まぶされた唾液が、ニチ、ニチツと、耳裏にへばりつく音をたてる。

これが、男に対して女が少なすぎる問題への、藍の対処法だった。一人が三人も四人も同時に相手できれば、‘混雜’も多少なり緩和できるはずだつた。

「うおおッ、やべえ、なんだこりや、これが手コキか!? マジか!? おほおおツ……！」

傾城の毒婦の、何よりも滑らかな指だ。しかも繰り出される性技は、一度味わえば他の女で決して満足できなくなるようなものだ。当然、男は魂の抜けるような声をあげながら、膝を力クつかせている。

「ぢゅるうう、ぐぶ……んはあツ、あもツ、れろれろツ。ぢゅちゅ、んふう、ぬぼお……くぶツ、ぴちやつ、ぢゅる……くぶんつ、はあ。ぢゅる……れろれろれろツ、くぶう」

次から次にしゃぶりたてては手で扱き、しゃぶりたてては手で扱く。頬は紅潮しきつており、口端からは白濁混じりの涎を滴らせている。蕩けた表情で魔羅をとつかえひつかえ

する様は、とても普段、八雲の式として活動する姿からは想像のつかないものだつた。

「つへへ、美味そうにチンポしやぶりまくりやがつてよお、とんつでもねえ淫売だな」

「全くだ、これで普段は幻想郷の管理者でございなんてツラしてやがんだからな。オラ、こつちもしやぶるんだよ、役目だろ」

「んはあ……なんだ、お前もか？ 仕方のないやつだな、ほら、あむうツ、れろおおおツ、ぢゅるツ、ぢゅるツ、くぱツ、ぐぼお」

「オア！ うおお、これが……ウオツ、おお、すつげ！ すつ、げ！」

男達はすつかり調子にのつており、彼女に次々に魔羅を押しつけている。藍も藍で夢中になり、己を取り囲むモノに次々尽くしていく。

「へへ、八雲の式と二ツ岩の狸、二大妖怪がチンポに媚び売つてやがる。天狗がいりやな、写真にバツチリ残してやるんだが」

男の台詞で、マミゾウのことを思い出す。男共の隙間から、彼女を見やる。

「おらおらマミゾウさんよ、そんなに下衆野郎のチンポが旨いか？ 涎垂らしてしゃぶりつきやがつてよお」

「ヒヒッ！ すつかり淫売のアバズレ顔になつてやがる。その顔晒したまま人里歩かせてやろうか、ええ!?」

「んふうう……ぢゅるうツ、くぶ、んふうツ、ぢゅぶ……ぐぼツ、がぼツ、くつぶ、んふ、くぼつ、くぶツ、ぐぶ、んくふうう」

手を伸ばせば届くくらいの距離で、藍と同じようにペニスに取り囲まれ、口腔で次々に奉仕していた。分厚い唇でくぼくぼと音を立てながら、魔羅全体をしゃぶり尽くしている。大きなストロークで頭を前後させて、根元から先端まで吸いつき回している。

「あもおツ、くぶう、ぢゅるる……んふうウ、ぶはあ。あむうウウ、れろれろ、んもお、れる、れろれろれろ……」

「おつ、おつ、お、そうだよ、そうやつて一生カリ首舐めてろ、てめえみたいな変態妖怪にやそれがお似合いだよ、ぶははは！」

赤く染まつた頬が蠢いているのは、口内で舌が踊り、男根を悦ばせている証拠だ。両手も肉棒に捧げられており、緩やかかつ大胆なストロークで扱き上げている。ときおり根元の玉に指が伸び、やわやわと揉みしだいていた。

「つくう……おつおつ、来た来たア、オラア、射精すぞ、一滴でもこぼしてみろ、二度としゃぶらせてやんねえぞオイ！」

「んふうう——んくツ、んくツ、んうう……」

男が威圧的に言い放つ。睾丸がきゅうつと収縮したあたり、射精したのがよく分かる。

べつとりと濁液の付着した眼鏡の奥、栗色の瞳が蕩ける。喉が小さく蠢いているのは、雄の欲望を体内に取り込んでいる証拠だった。

「んばおツ——はああ……」

ぶぽんツ、と音を立てて、唇が亀頭から離れる。恍惚の溜息ののち、二者の間を白濁の混ざった糸が伝う。唾液と精液のミックスジュースだ。

チユルツ、と、マミゾウはそれを啜り立てる。勿体ないと言わんばかりに。

「あはあ、ン……あもおツ、ぐぶツ、くぱくぱくぼツ、れろおお……ツ」

軽く息を整えると、彼女はまた別のモノにしゃぶりつく。ペニスが美味でたまらないのだとでもいうように。浮かんでいるのは、娼婦ですら見せない、卑猥という概念そのもののような顔だった。

「おいおい藍サマよおー、お口がお留守になつてんぞオ?」

「お友達のお仕事の見学はいいけどよお、自分がやることを疎かにされちゃ困るねエ」

「む……す、すまんな」

言われ、我に返る。彼らの言う通り、雌獣の淫らなる様に、つい見とれてしまっていた。なんといつても自分も、あのような様を晒しているに違いないのだから。

「んふううツ——れる、れる、れるおおおん……」

「うわ、ちょっと待て、急にやる気出してんじゃねえ……おッ、出る出る、おああ！」

舌の腹を活かして、竿の下部を広く舐め回す。限界を迎えた肉竿がスペルマを吐き出す。今日何発目かの口内射精を、音を立てて嚥下していく。じゅわじゅわと、両脚の間から蜜が滴っている。決して気のせいではなく、足下には雌汁の染みが浮かんでいた。

「ンぱっ」

「はは、なんじやそりやあ」

口を離す。息をつくと、けぶうと、小さくげっぷの音がした。下品極まりない。しかし、彼女のような普段気高く振る舞つている女がそのような様を晒すことで、男どもはむしろ興奮をかきたてられたようだつた。

「へへッ、まったくとんでもねえ雌共だなあ。そんなにチンポが好きならよお、こういうのはどうだア!?」

「がぼオツ」

ラバークリップで便器のつまりを抜くときのような、およそ場に不釣り合いな音が鳴つた。勃起したペニスが、口腔を深々と貫いたことによる音だつた。男の一人が、藍の後頭部をがつしりと押さえ、自らに向けて引き寄せたのだ。

「そおーら、大好きなチンポだぞ！　たつぶり、味わえ、こらあ！」

彼はそのまま、ロツクした藍の頭めがけ、激しく腰を叩きつける。さながらオナホールかなにかのようにな。

「ごつ、ぐぶツ、ぐぼツ、オゴツ、ご、れろお、ぐう、んグツ、ぢゅるツ、ぢゅぼおツ」「オウツ、すつげえ、はは、喉で吸い付いてくるぜこりやあ！」

オナホールとしては相当上等、というかあり得ないほど極上だろう。なにせ、道具同然の扱いを受けながら、なおも魔羅に吸いつき舐め回し、悦ばせようとしているのだから。

そもそも、普通の女何十人ぶんという性経験を積んでいる藍にとって、イラマチオなど特段珍しいことでもない。合唱するときのように喉をしっかりと広げ、男根を深くまで受け入れるのがコツだ。がほがほと排水口に水が流れるような音をたて、涎を滴らせながら、彼女は男を受け入れていく。

「上等だよお雌狐がよお、喉がチンポの形になるまで突きまくつてやるからなツ！」

「ブツ、ぐつ、ごつ、おブツ、んぐぶ、ぼツ、ぐツ、ぶえツ！」

その様は、男の征服欲を大いに刺激したらしい。抽送は、一層激しくなる。唯一無二の美貌に、セックスするような勢いで汚らしい下腹を打ち付ける。

ばしんばしんとピストンサウンドが響く。鼻筋が陰毛の密林に埋もれ、濃厚な雄の臭いが肺に流れ込む。細い喉が蠢いているのは、亀頭のシルエットが浮かんでいるからだ。

「ぐうつ、ンぐうつ、ぶツ、ふツ、くううううツ」

視界がぐらつく。ペニスで脳髄をこねくり回されているようだ。この、坂を転げ落ちるような浮遊感こそ、イラマチオの醍醐味だつた。

「へへへ、どうだあ、チンポで串刺しにされる気分はよおツ」

「手え休めるんじやねえぞ、この程度で休んだらぶつ殺すぞオイ！」

言われるまでもない。このように虐げられている状況でも、藍はしっかりと左右の手で肉竿を扱き立てていた。勝負のことを忘れたわけではなかつた。むしろ巧みになつていてるくらいだ。オンナとしての興奮が、奉仕にも相応に熱を入れさせていたのだつた。

「おぐうううツ、ぐごツ、オ、ツ、ゴツ、ぐうう、うぐううう……！」

横から、くぐもつた苦悶の声が聞こえる。藍のあげるものに似てはいるが、聞き苦しい。ちらりと視線をやれば、マミゾウも同じように、イラマチオの口虐を受けていた。下腹が叩きつけられるたび、丸眼鏡がちやきちやきと小さな金属音を立てている。

どうも彼女の場合は、こうした行為は不慣れらしい。ぶぼぶぼと汚音を口腔から鳴らし、男の太腿を、タップするように叩いている。もちろん無視されているが。

正しい受け止めかたを知らないと、ああして苦しむことになる。それでも男の側は快樂を得られるので、行為を中断することにもならないのが、彼女にとつての不運だろう。

どう見ても余裕のない状況だが、手淫は行つていて。いやあれは手淫しているというか、マミゾウの手を使って、男達が自分のモノを扱いでいるといった方が適切か。なんにせよ、彼女の口も手も、しつかりペニスへの奉仕に捧げられているようだつた。

「オラ出すぞ雌共、胃袋ごと孕んじまえツ」

「ぶツ——」

腰が押し出され、対して頭はぐんと引き寄せられる。結果、肉竿は二人の口腔を、食道に至るまで深々と貫いた。同時に男は絶頂を迎へ、白濁が吐き出されていく。

精液に含まれる精子は、一発につき何億ともいわれる。文字通り無数だ。数え切れない精虫が、彼女らの食道を蹂躪していく。粘膜に絡みつき、へばりつき、孕ませるべく鞭毛を蠢かしては頭部を埋め結合しようとする。

「ンふツ、ンウウ、おツ、んうおおおおおおんツ」

「おつ、オ、ぐごツ、ごむううう、おおおおおおツ」

食道に卵子は存在しないわけで、一見すれば、無為な試みだ。だがその蠢動が生み出す熱は、大いに二人を狂わせていた。雌として堕落させるのに役立つていたのだ。胃袋に、濃厚な種汁がどぼどぼと落下していく。まさしく、腹を孕まされてしまいそうだ。

「ぢゅるううツ、ぢゅるツぢゅる、ぢゅつぢゅつ」

「ぐぼう、ぐぶつ、ずぞつ、ずずつ、ぢゅるうう」

恍惚のあまり、己を虐げる男根に無意識のうちに吸い付いていた。二匹の雌のぱつたり分厚いリップが、己を深々と刺し貫く男根を包み込んでいた。男どもは、いつそう興奮を煽り立てられる。

「オツ、おおツ、おお——へへへ、言われたとおりにできたじやねえか、いい雌便器だ。で？ どんな無様なツラあ晒してやがんだ？ 見せてみろや」

「ぶぱお——はツ、は、あはあ、んはあ」

「ぶぱツ、……はへ、あへつ、お、んあ」

たつぱり二、三十秒ほども後始末にかけた後、ようやく顔面を解放された。

本来なら、無様という言葉は、彼女らとは対極にある。だが今は、あながち的外れとも言えなかつた。二人の表情に、理知と呼べるようなものはない。虐げられる悦びに浮かれ、すっかり蕩けた顔は、雌以外の何物でもない。こうした下品ではしたなく淫らな表情を、彼らの貧相な語彙で表すと、すなわち無様なツラということになるのだ。

「へへへ、おいこつちも見ろよ、ぶつかけてやるぜえ雌共、嬉しいだらうが！」

「こつちもだ！ 顔面ザ—汁まみれにしてやんよ！」

「アツハ、ああツ、熱つ、んひいい……」

「はっ、おう、んおお、やめんか、おぬしらア……」

前後左右を、またもペニスが取り囲む。しかも今度は、口腔奉仕の暇すら与えられない。男達は、自らの手で肉棒を扱き上げていた。性衝動のままに、たっぷり詰まつた金玉の中身を、こちらめがけてぶちまけてきたのだ。

「あっ、うわッ、ああ、あはあ、ああん……」

「ぬう、あ、ああツ、あひ、はあツ、あ……」

鈴口から砲弾のように放たれた濁液は宙を舞い、物理法則に従い彼女らの顔面にびちゃびちゃと着弾する。染みどころか僅かな傷ひとつすらない美貌が、雄のスペルマにまみれていく。それも、一発や二発ではない。金玉の中身全部をブチまけてやるのだというほど、何人分かも分からぬほどの種汁を浴びせかけられる。

「へへッ、そらそら、全身ザーメンコーティングだ」

ここまで大量のスペルマを浴びせられては、流石の藍も、目を閉じずにはいられない。それがいけなかつた。コイツ隙を見せたぞとでも言わんばかりに、彼らは調子に乗つて、濁液をあらゆるところにぶちまけていく。どこをというレベルではない。顔だけでなく、首や腋窩、腋や乳房、腹に背中、ヒップに陰部、文字通りあらゆるところだ。

「そおら淫乱狸、大好きなザーメンでお化粧だぞ、嬉しいだろが」

「だつ、誰がお前らの子種汁などお」

「ンなこと言ひながらムチ腿擦つてニチャニチャいわせてよお、何がしたいの？ お前」

マミゾウの健康的な肌にも、同じようにスペルマがふりかけられていく。愛用の丸眼鏡はレンズ洗浄の洗剤を塗ったようにべとべとだし、艶やかな唇に亀頭を押しつけられては、白濁を塗り込められている。鼻腔にまで射精されて、むせているほどだ。

腋窩にぶちまけられたスペルマを肉竿で塗り込められ、乳房の谷間まで子種塗れにしてやるぞというように執拗に汚されている。恥ずかしがりの陥没乳首が一度と隠れられないようになるとでもいうように、乳頭まで濁液でデコレーションされている。ショートケーキの上の苺に、練乳を垂らしているようだ。

むつちりしたヒップなどは言うまでもなく、寛骨のあたりから暴れる尻肉に至るまで、真っ白に染まっていた。先の愛撫勝負の間、散々スパンキングされたことで赤くなつた尻に濁液がまぶされて、さながら雪桜のようだつた。

「そら、ご自慢の尻尾もスペルマ塗れにしてやる。嬉しいだろうがよお」

宣言通り、男達は己の射出口を二人のふさふさした立派な尻尾へと向け、種汁を放つ。中には手ではなく、尻尾で竿をこく者までいる始末だった。

毎日丁寧に手入れしてきた艶やかな毛並みに、子種汁がべつとりと絡みつき、台無しに

されていく。駄目押しだというように、手で塗り込まれる。

妖獸共通の悩みだが、尻尾に何かこぼすと、匂いが取れなくなつて困る。特に、こんなふうにされでは、ちょっと風呂に入つた程度では絶対に取れないだろう。しばらく町中を精臭を振りまきながら歩くのだとと思うと、たまらなかつた。

雌のフエロモンと雄のフエロモンをむわむわと漂わせる、最高の肉体の女——。

「あ、あはあツ」

一体どんな風に見られることだろう。考えるだけで、八雲の大妖怪ともあろうものが、小娘のようにもじもじと内ももを擦り合わせてしまう。

「そおら仕上げだケモノ共、上向け上ツ」

高圧的な命令に対し、二人は大人しく天井を見る。ひどく素直だ。圧倒的な量の精子を浴びせかけられたことで、雌の本能が屈服していたのだ。

もちろん、ただ天を仰いで終わりではない。何をされるか、いやしていただけるのか、ちゃんと理解している。目を閉じ、口を開き、舌を突き出し、手を添えるおまけ付きだつた。「おつおつ、二人揃つてイイ便女面じやねえか、そおら受け取れツ」

便女。なんという響きだろうか。八雲の式が、二ツ岩の大明神が、そのように呼ばれることなど、あつてはならない。だというのに、酷く魅力的に感じられた。

「あはあ、ああんツ、熱う、あああ」

「あつあつ、なんじや、ああん、あ」

得体の知れない恍惚に浸る二人をさらに堕落させるように、べちゃべちゃとスペルマがぶちまけられていく。髪に額に眉に耳、瞼に目尻に涙袋に頬、鼻筋、鼻頭、鼻翼に鼻孔、人中、唇、おとがい。ありとあらゆるところに、スペルマが次から次へ厚塗りされていく。精液でバームクーヘンにしてやるのだというように、徹底的に。

もちろんそれで終わりではない。大きく開かれた口腔に、ピンクの口腔粘膜に、べちゃべちゃと濁液がぶちまけられていく。もはや誰のものか、何人分かも分からぬ子種汁が、味覚を強烈に刺激する。口腔に溜まつたスペルマで、とてつもない悪臭のプールができる。口端から滴り、頬をつたい、ねつとりと乳房にまで伝っていく。

「どうだあ淫乱どもが、お前らにはぴつたりの化粧だぜ」

「ンフツ……フウツ、フウ、フウウー……」

口は精液だまりと化しているので、鼻呼吸するしかない。すると、激臭が肺に流れ込む。雄、雄、雄、酸素、雄、雄、酸素、雄といった感じで、むせ返ってしまいそうだった。まつたく、たまらない。

「よおし雌共、キスしろ、キス」

「おおッ、すげえアイデアだなそれ。イヒ、ライバル同士の狐と狸を、俺たちが仲良しにさせてやるつてんだ、感謝しろよ」

この雌狸と接吻？ ありえないことだ。

普段なら、そんなことは絶対に拒否するだろう。だが欲情に突き動かされた今だけは、とてつもなく素晴らしい提案に思えた。

向こうも同様に感じているらしい。熱烈に抱き合ふと、散々魔羅をしゃぶつてきた唇を、むつちり艶やかなリップを、互いに重ね合わせた。

「んふうううううう、むちゅ、ねちゅう」

「ンぷつ、れろお、ちゅむう、んくふう」

むちゅううう、と、濃厚なキッスノイズが響く。ぽつてりと妖艶な唇同士が触れあつたからこそ鳴る、淫らなりップサウンドだ。

二人はむちゅりむちゅりと唇を触れあわせ、粘液を擦り合わせながら、お互いの口腔に溜まつた濁液を交換しあう。もともとですら何人分、何十人分だかも分からぬ遺伝子をミックスしあつていく。互いの唾液まで混ざつた、おぞましいジユースを作りあげていく。繋がりあつた口腔から時折れろつ、れろつと覗く舌は、練乳まみれの毒を連想させた。

「んう、んふう、れろお、れるれる、んちゅぶ」

「くうん、むつ、んちゅぶ、ちゅぱつ、れるう」

ぐぢゅるぐぢゅるとスペルマをやりとりしながら、二人は身体を重ね合う。

極上の美肉が絡み合う様は、男の欲情を煽り立ててやまないものだ。白濁まみれの豊満な四房の乳が押しつけられあい、むにりむにゆりと形を変える。

そんなのはもう、卑猥どころの騒ぎではない。もはや、ある種の危険物だつた。雄の種を搾り取り、睾丸の中身を空っぽにさせる危険物だ。

「んくぶう……んくツ、ちゅる、んく、んゲ、んう」

「ごッ、んく、ぐむう、んつ、んつ、こくん、んつ」

互いの口腔で種をやりとりしながら、二人はそれをゆつくりと嚥下していく。細い喉が、ゆつくりと蠢いている。無数の精虫を、胃袋に収めている証拠だ。食道まで雄の遺伝子にまみれながら、二人は恍惚の表情を浮かべている。

「んぱつ……あはあ……」

「ふはあ、あつは、ああ」

やがて、唇が離れる。大量の精液を、余すところなく飲み干し終えたからだ。胃袋が、妊娠したかのように重たかった。

離れた唇の間に、白い糸が伝う。ほんの少しでも多く味わいたいのだといわんばかりに、

二人して競うように啜りとつてみせた。

「よおし、丁度三十分。終了だ」

熱い溜息を漏らすと同時に、塩屋の声が聞こえた。ひどくぼんやりとしている。耳穴にまで精子が入り込んだらしく、うまく聞こえないのだ。

「たっぷり楽しんだようだな？ ケモノ共が。脳味噌まで精液に染まりきったか？ まあいい、集計の時間だぞ」

濁液まみれの二人の顔へ唾を吐きかけながら、塩屋は嗜虐を顔に浮かべ、言う。

「お前らのような雌穴は、チンポを射精させることしか使い道がないんだ。負けたほう、すなわち用途を満たせなかつたほうは、躰が必要だ。泣こうが喚こうがこいつらが一晩中こいつらがブン輪姦すからな、覚悟するがいい」

「あはあッ……」

吐き捨てるような罵声も、当初ほどは屈辱を感じなかつた。このように蔑まれることを、ペニスに屈服した本能はむしろ好ましくすら感じていた。

「よおし、まずはこの浅ましい雌狐で射精したやつ、拳手しろ」

ねとねとと粘液の絡みつく瞼をうつすらと持ち上げ、細い目で結果を見る。手を上げてしているのは、三十人中三十人。つまり、パーエクトだ。

この時点で、藍の負けはなくなつた。やはり最後の集団射精が決め手だつたのだろう。内心でほくそ笑んだ。

「はん。なんだ全員か？ こらえ性のない奴らめ、道理で部屋がザーメン臭くなるわけだ。次はどうだ？ こっちの変態狸女で射精したやつは？」

男が問いかける。横目でマミゾウを盗み見る。悪いがお前が犠牲になつてくれと。ところが彼女は、目を見開いていた。長いまつげに粘液が絡みついている。どうも驚愕しているようだつた。

「んなッ……」

何事かと思い、男達を見る。そうして彼女もまた、目を見開くこととなつた。男達は、またしても、その全員が手を上げていたのだ。

「ほっほお、これはこれは！」

沈黙を破るよう、布屋が手を鳴らす。たるんだ顎が震えていた。

「二人揃つて全員射精させると、いやはや、極上の便女二匹が揃うと、このようなことになるわけですね。まさか引き分けるとは……とはいえ、これでは勝負がつきませんな」男は思案するように、たっぷりした顎——多分顎のあるだろうあたり——に手をやる。まずいと感じたのは、藍だつた。彼に案を出せたら、絶対にろくな展開にならない。

最後の集団射精でうやむやになつてしまつたが、最初リードしていたのは自分だ。そのへんを根拠に、こちらの勝利ということにしてもらわなくては。

だが、藍が何か言うより先に、布屋は結論を出してしまつた。

「では、両方仲良く負けにしましよう。二人揃つて輪姦です。^{レイブ}お二方にとつては、嬉しい限りではないですか、ええ？」

「ま、待て、そんなのは無茶苦茶だろうが、話が違う！」

「そ、そうじや、引き分けは引き分けじやろ、両方負けなぞというのは筋が通らん！」

二人揃つて反論するが、男は当然、聞く耳を持たない。

「話が違うというのは妙ですな。我々は引き分けたときの話をそもそもしておりません。筋が通らない？ いやいや、我々が筋ですとも。そもそも、弄られまくつてイき狂つて、チンポしやぶつて涎を垂らし、ザーメンまみれになつて悦ぶ淫乱マンコが、よくもまあ、男に口答えできるものですな？ チンポに媚びて生きていくべきケモノどもが、分不相応なことをするものだ。これは、よっぽどひどい躰が必要か。なあお前達？」

「ひひ、そうだな、間違ひねえや！」

「いやあ、旦那は流石だねえ！」

布屋が問えば、男達はyanやyanやと乗つかつてくる。結局、多数決で、一人には罰が

課せられることとなつた。

「四つん這いにさせろ。アレを持つてこい！」

「アツ、ちょ、つとまで、やめ、この、ああつ、待つて、今おまんこは、ああ」

「くうう、普段ならこんな連中、おいでさくさに尻を触るでないわ、ああんつ」

啞然とする二人をよそに、塩屋が言い放つと、男達が二人に群がる。人間ごとき、普段ならいくらでも払いのけられる。だが、散々アクメさせられた今はどうしようもない。

「こ、このお、八雲の式にこのような格好を」

「お主ら、あ、後で覚えておけよ」

あつという間に組み敷かれる。四つん這いで頭を下げ、尻だけ高く掲げた、滅茶苦茶に屈辱的な姿勢だった。

「いやあ、ドエロい格好だねえ」

後ろから見れば、二人分のむつちりしたヒップ、ねつとりとした本気汁を垂れ流す穴、そして外気に触れてヒクつく窄まりを楽しめる。もちろん彼らは、大いに堪能していた。

「そおら、雌共、お前らにとびきりの恥をくれてやるぞオ」

「一生外を歩けなくしてさしあげましょか。わははは」

声に嗜虐を浮かべながら、塩屋と布屋が二人の後ろに屈み込む。一リットルは優に入る

だろう、ばかでかいシリンジを抱えていた。

「ち、……ちょっと待て、お前達、それは。いや、待った待った待った！ 本当に！」

先に何をされるか察したのは、藍のほうだった。性経験の豊富さゆえ、大抵のプレイはこなしている。彼らの持つソレを使つたことも、まあ、何度がある。あるからこそ分かる。

今、ソレは、やばい。

「このシリンジに入っているのは、永遠亭から仕入れた特製のローションでしてな。最初お二方に飲んでいた薬。アレをたっぷりと溶かしてあるのですよ。まあつまり媚薬のカタマリみたいなもんですな。無様にイき散らさないように、精々堪えることです」

「はあッ？ そ、そんなもの……バツ、カジやないのか!?」

思わず絶句する。人間というのは、ときには妖怪ですら思いつかないような外道の行いにでることがある。今が、まさにそれだつた。

最強の妖獸をこうまで狂わせる薬を、腸に直接注ぎ込まれる？ それを、ひり出さないよう堪える？ 不可能だ。できるわけがない。

「そおら、極上の屁に浣腸をキめてやるぞお」

「あひッ、やめ、やめろ、待ッ」

「んふうッ、お、お主らあアア」

シリンジの先端が、きゅつと窄まつた肛門に触れる。狭穴をぬるりと割り開いて、侵入してくる。普段ならばやめんかと罵倒するだろうマミゾウも、今ばかりはがくがくと髪を振り乱して悶えるばかりだ。

「おいおい、まだ注入しはじめたわけじやあないんだぞ？」

「この程度で音を上げるとは、妖獣というのはまるで大した妖怪ではないですかア？」

「お、ひ、入つて、やめ、あくうううううツ」

「ぬう、このお、はひツ、あう、んんんんツ」

ニヤニヤと嘲笑いながら、彼らはじわじわと、シリンジのピストンを押し出していく。重たいものが、腹の中に侵入してくる。人肌程度に温められた、どろどろのローションだ。異物感に、全身にぶわりと汗が浮かぶ。ぞくぞくとこみ上げてくるものに、身体が震える。乳房がふるふると揺れている。

「やめツ、やめ、ほおおお、おひツ、あおツ」

やめろという言葉すらろくに紡ぐことができない。屈辱とは裏腹に、アヌスから官能が広がり、嬌声となっていく。

肛門が焼けるように熱い。いや全身がだ。まだ薬液の半分も注がれていないというのに、媚薬は全身に回りつつあった。全て注がれたらどうなつてしまふか、想像すらできない。

「ひいツ、ひいいい。あひ、いいいいツ」

奥歯を噛みしめ顔をくしゃくしゃにしながら、マミゾウはどうにかこうにか堪えようと
しているようだつた。その後ろから、塩屋のサディスティックな命令が浴びせられる。

「零すなよお？ 一滴でもこぼしたらもういつぺん入れ直しだぞ、雌狸。まあ、そうして
ほしいなら思い切りブチまけて、無様なスカトロ狸に成り下がるがいいわ、ワハハ」

「き、いひツ、きつさまあ」

殺意を込めたのだろう言葉も、酷く情けなく響くばかりだつた。ぎゅるぎゅると、二人
の腹が異音を立てる。溜まつた薬液が、出口を求めてぐるぐると唸つている。

「そおら、終わりだ。気分はどうだ？ ケモノ共が」

「はひツ、あうツ、あはあツ、あ、くはああ」

「ああつ、あお、はひ、あへツ、はああんツ」

たつぶり一分ほどもかけて、シリンジの中身はその全てが、二人の体内に収められた。
どろりとしたものが腹の中に溜まつてゐる異物感に、それぞれ脂汗を浮かべてゐる。だが
それ以上に、その美体を、欲情に燃え上ががらせていた。

「おいおい見ろよコイツらのザマをよ！ 乳首なんかこーんな勃起してんぜ！？」

「はひいツ！」

おつ勃つた先端を、きゅつとつねり上げられる。それだけで、先ほどの愛撫地獄よりも甚だしい快感が全身を駆け抜けた。

「こつちも、恥ずかしがり屋の陥没乳首ちやんだつた癖に、今じや立派に主張してよお」「ほツ、おおツ、おひツ！ おお、んくあああ」

マミゾウはマミゾウで、ぷっくりと膨れ露出した乳頭をしこしこと扱き上げられている。乳肉をゆさゆさと揺らしながら、太い声をあげて感じている。

二人して、内ももをしきりに擦り合わせていた。溢れ出る欲情を少しでも抑えるために。もちろんそんなものではとても足りない。まさに焼け石に水だ。

「た、頼む、廁に」

「は？ え？ なんだつてえ？ 聞こえねえなあ。俺あ耳が悪くてよう！」

だらだらと、栓が壊れたように、ヴァギナは淫蜜を滴らせていた。アナルは矢鱈滅多にヒクついて、今にも決壊しようとしている堰を、どうにか抑えこんでいた。

「よし。ペナルティはコレで終わりだ。あとは当初の予定通り、負け犬二匹への罰だな。たっぷり輪姦してもらえ、雌ども」

「そんな、無体な」

「うひょおー！ 待ああつてましたあああ！」

塩屋の宣言に戦く藍だが、聞き届けられることはない。ひゅうひゅうと囁し立てる男達の歓声に、全てかき消された。

「へへへ、最初は俺だア」

「いや俺だ！ 俺にハメる権利がある！」

「おめえはこないだ奢つてやつたろ！ 俺だよ、オレオレ！」

四つん這いになつた二人の後ろを、男達は競うように奪い合う。蜘蛛の糸に群がる亡者のごとしだ。それでも最終的には、どうにか順番を決めたらしく、それぞれ男が屈み込む。「ま、ツ、待たんか、お主ら、今は、今だけは」

氣弱なマミゾウの声には、焦りがありありと浮かんでいる。今挿入れられたりしたら、本当に気が狂うと思つてゐるようだ。同じことを、藍も考へてゐる。とはいへ、無駄だ。彼らは、自らの欲望にのみ従う。穴が何を言つたところで、聞き入れられるはずもなかつた。「そおら挿^ハ入れるぞ、挿^ハれるぞオ、イヒヒ、八雲藍の、淫乱とろとろマンコに挿入だ、それ一、二の、さあん！」

「へへ、尻尾振つてケツくねらせやがつてよ、狸が。お前ホントは欲しくてたまんねえんだろうが？ そんなに欲しいんなら、くれてやるよ！」

「あひ、はツ、ああああああああああああああツ！」

「やめ、待つて、あ、あ、んおおおおおおお！」

ぶぢゅんと、濃厚な水音が二重に響く。濡れに濡れきつた淫裂を、滾りに滾った肉竿が
思い切り貫いた音だった。

二人揃つて、背筋を思い切り反り返らせる。そういう楽器であるかのように、高い声を
上げて身悶える。がくがくと全身を痙攣させ、たつた今貫かれたばかりのヴァギナから、
ぶしいつぶしいつと濃密な雌汁を噴き出す。

誰が見たつて分かる。二人は、絶頂していた。

「ぎやはははは！　ハメただけで即イきかよ淫乱どもが、ええ!?」

「やっぱ所詮はケモノだよなあ、交尾できてりやハッピーつてわけだ！」

「なら俺らが一晩中交尾しまくつてやるよ！　嬉しいなあ、ええ!?」

「あひいッ、なんだ、なんなんだこれは、ああ、あああ」

嘲笑され、これ以上ないほど見下されているが、どうこう考えるだけの余裕などなかつた。
かつては傾城傾国と鳴らした藍は、当然、性交の経験も豊富だ。その経験で格付けする
なら、今己を貫いているペニスは、中の中、下寄りといったところだ。大したことはない
というのに、狂つてしまふほどの官能が全身を駆け抜けていた。挿入れられただけで絶頂アクメ
してしまうほどに。

「ほツ、ひ、あくふうツ、おお、あお、んあああ」
マミヅウも同じであるようだつた。半ば白目を剥きながら、口端から涎を垂らしている。
全身の痙攣が、彼女の覚えているものを端的に示していた。

「うおおおお、なんだこのマンコ、ミミズ千匹なんてもんじやねツ、やつべ、やつべ」
「ぬあ、吸い付いてきやがる、脂が載つて、おあああ、こんなもんお前、うおおおお」
とはいえ、狂つてゐるのは彼女らばかりではなかつた。彼女らに挿入してゐる男二人も
また、狂わされてゐた。なにせ、彼らが突つ込んだのは、どれだけカネを積んでも決して
抱けないような極上の女なのだ。しかもその膣穴は、媚薬によつて肉欲に狂い、ペニスと
みるやきゅうきゅうと締め付けて歓待する、最高の淫乱穴だ。

所詮ごろつきに過ぎない連中が、そんな穴に突つ込んで、まともでいられるはずもない。
一発で、腰振り猿と化してしまう。

「ツハあ、とんでもねえドスケベマンコしやがつて、この淫乱どもがよおツ！」

「チンポで、こうして、ほしいんだろうが、アアン!?」

「くはあツ、ああ、はひツ、あお、ううんツ、ああ！」

「やめ、やツ、ああツ、あああーツ！　はひ、おひ、ああ！」

高圧的に喚きたてては、男らは激しく腰を前後させる。ぢゅぱぐぢゅぶぢゅと、結合部

を男根が激しくめくり返す。肉竿が出入りするたびに、濃厚な雌蜜が激しくしぶき、床を濡らしていく。

二人揃って、聞き苦しくみつともないよがり声をあげる。激しく独り善がりな抽送を、どのように感じているか、尋ねるまでもなく明らかだつた。

「おほお、ひいツ、あはあツ、あおツ、おおツ！」

「ほひツ、んおお、くはあツ、おおおん、ああ！」

ばちばちばちばちと、勢いよく腰が打ち付けられている。そのたびに二人は喘ぎ狂う。むつちりとしたヒップが波打つていて。その奥の、薄灰色の窄まりは、今にも決壊しそうなのを我慢していますと言わんばかりにヒクつきまくつていて。

「いやあ、壯觀だぜエこりやあ」

前後に突き上げられるたび、たわわな乳房はゆさゆさと揺れている。豊満な乳肉四つがぶるんぶるんと暴れる様は、男達の視界を大いに悦ばせているらしい。その様を肴に、己の一物を扱き立てる輩までいる始末だつた。

「ひいツ、ひい、いく、いくうう」

「はひい、らめ、あはツ、おおお」

揺れるのは尻や乳房ばかりではなかつた。意識もだ。腸壁から直接吸収された媚薬は、

彼女らの性感を数倍ほどにも引き上げていた。一突きされるごとに軽く絶頂し、ぶしぶし潮を噴くような有様だ。

そんな状態だから、まともな意識など持てるはずもなかつた。ただただケモノのように喘ぎ、交尾の幸福に狂うことしかできないでいる。

「おおおい、喘いでばつかじや面白くねえんだよ。もっと腰振れや腰イツ！」

「ひいーんツ！」

たっぷりした尻が浮き上がる。妖獣の最大の弱点、尻尾の付け根を握られて、思い切り引つ張られたのだ。そこは神經が集中しており、男性で例えればペニスに等しい。媚薬で狂つた状態でそんなところを刺激されたのだから、脳神經に走つた信号は相当だつた。

逃げるよう腰がうねり、くねりはじめめる。その卑猥極まる動きは、ちょうど、男根を悦ばせるためのものにそつくりだつた。

「はツははは、ケツくねらせやがつてよ、そんなにチンポがいいかよオ、おいツ！」
「うあ、も、もう無理、廁、廁に行かせてエツ！」

どちらからともなく、彼らに懇願する。しきりに尻をくねらせる様に、妖獣の誇りなどどこにもない。とはいえるのも仕方のない話だ。肛門は早くも限界寸前だつた。ともすれば、その中身をすぐにでもブチまけてしまいそうなほどに。そうなつたらもう、

誇りもクソもなくなつてしまふ。

「あ!? 行かせるわけねえだろうが、代わりにイかせてやるけどな！ どうせならここで
ブチまけちまえよ、なあ!?」

「おいおい、待たんか。あの八雲藍に二ッ岩マミヅウがこれほど丁寧に頼んでいるのだ。
叶えてはやれないにしても、少しはその思いを汲んでやるのが人情というものだろう?」

「は？ 塩屋の旦那ア、そうは言いますけどね、この小屋、廁ねえつすよ」

「分かつておるわ。だが何も、馬鹿正直に廁へ案内するだけが対処法ではないだろうが。
そら、これを差し上げろ。これならお二人にも、たっぷり満足いただけるだろう?」

「あ――ああー、そういう。へへ、よかつたなア、雌マンコ共。旦那がお前らのために、
すげえもん用意してくれたぞ」

排泄したいという意を汲んで、彼らが用意したもの。もう嫌な予感しかしない。

だが、そのプレゼントを拒む暇すら、二人には与えられなかつた。

「そら、プレゼントだ、受け取れや！」

ぬぶんと、粘っこい音が室内に響く。潤滑油まみれの菊穴に、異物がねじ込まれたのだ。
塩屋のプレゼントとは、黒光りする極太バイブだつた。男達はそれを、こともあろうに、
二人の尻穴にねじ込んだのだつた。

菊穴へのいきなりの挿入。普通なら括約筋が傷ついてもおかしくはないが、妖怪の頑丈な肉体が堪えてみせる。もつとも、それは傷がつかないという意味でしかない。走る官能は、とうてい堪えられるようなものではなかつた。

「な、ちよ、あああああああああああツ!?」

「イツ、ひ、おひいいいいいいツ！」

裏返つた、極めて間抜けな声をあげて、脳味噌を襲つた刺激に全身を震わせる。濃密な雌汁が、ぶしいツ！ と、肉竿を咥え込んだ雌穴から噴き出した。

二人まとめて、肛門挿入で絶頂したのだ。

「どうだア、これならわざわざクソしなくとも、漏らすこたあねえだろうが!?」

「いやあ俺らの旦那は賢いなあ全く！ 良かつたなあお前ら、これで廁にいく必要もねえじやねえか!? しかもケツイキまでキメられるなんざ、一石二鳥じやねえの！」

「やめ、ほひツ、オアツ、あおうウ、おおおんツ！」

「ひ、ひいツ、あひい、オオ、ひ、ツ、ああああ！」

言いながら男共は、二人のアヌスにねじ込まれた張型をズボズボと抜き差ししてくる。

今までよりも一層激しく、ばすんばすんと腰を打ち付けていく。ムチムチと豊かな尻肉を揉みしだきながら、最強の妖獸の最弱の膣穴を、ペニスで征服していく。肉体の快楽以外

にも、女を弄び踏みにじる精神的快感を心ゆくまで楽しんでいた様子だつた。

「はひいいッ、あおおんツ、だめ、らめッ、はひ、チンポ、ああ、ああああ！」
「くひッ、おひいい、ああツ、チンポが、チンポが奥までエ、ひい、ひいい！」

もはや二人は、よがり狂うという言葉でも生ぬるい程に感じている。雌獸の姿勢で尻をいやらしくくねらせ、二穴をほじくられ喘ぐ姿に、大妖としての威厳など全くない。

それでも男どもは、なおも満足していなかつた。八雲藍と二ツ岩マミゾウの価値を極限まで貶め、便女に仕立て上げんとする。何より、男が三十人もいるのに、膾しか使わないと云うのは、あまりに馬鹿げた話だと考えていた。

「へへへ、おい見ろよ雌共、これなーんだ？」

「正解はチンポでした！ ワハハ！」

二人の眼前に、それぞれ男が立つ。怒り狂つた猛々しき肉棒が突き出される。お前らの痴態のせいでこうなつたのだぞと言わんばかりだつた。

次の瞬間に何をされるか、藍の聰明なる頭脳は見抜いた。見抜いたが、だからといって逃げられるわけでもなかつた。

頭を両腕で抱えこまれ、しつかりとロツクされる。男達は、ひたすら嬌声をあげて全く閉じようとしない口腔を、肉竿でもつて貫いた。

「ごほッ！　ぐ、——んうううううう！」

「んぶううッ！　ふツ、んう、んんん！」

くぐもつた声があがる。本日二度目のイラマチオだ。前から後ろから串刺しにされて、二人は全身をピンと張り詰めさせる。この狂ったようなセックスが始まつてから、何度もかの絶頂だつた。今夜全体でいえば、もう数えるのも馬鹿らしい。

「お!?　なんだ、チンポ咥えてイツちまつたか!?　どういうこつたよ、ええ!？」

「そんなにチンポが好きなら、好きなだけしゃぶらせてやるよ、オラ、オラオラオラ！」間髪を入れず、抽送が始まる。

彼らは、もはや二人を畏怖の対象として見ていない。気持ちよく射精をぶつこくための、ちょっと上等なオナホールくらいの感覚だ。従つて、ピストンには全く容赦がなかつた。それでオナホが壊れたところで、また新しいのを連れてくればいいだけなのだから。

ばちんばちんと、顔に下腹が打ち付けられる。顔が陰毛に埋もれ、濃密なオトコの体臭が脳髄を満たしていく。

「んふううウ、オうツ、んぢゆるうツ、ぢゆる、ぐぶツ、ぐぼおお」

「んふう！　おツ、おおんツ、くふうツ！　ひ、くふう、ぢゆるう」

ぼぢゅッぼぢゅッと、唇が激しく音をたてる。あろうことか彼女らは、膣も喉も深々と

犯され、串刺しにされながらにして、しつかりとペニス奉仕をしていた。

蕩けきつた表情を浮かべながら、ヌメる分厚い唇で、ぐぼぐぼと男根をしゃぶり倒す。口内では、亀頭や雁首、竿を舌がレロレロと舐め回している。それはほどんど、意識しての行為ではなかつた。腸内に注がれた媚薬に狂う雌の本能がなさしむる業だ。

「おつおツ、締まる締まる締まるう～ツ！」

膣を貫く男らは、口淫の興奮でぎゅうぎゅう締め付けるヴァギナに、感極まつたらしい。スパートをかけるように、ピストンを激しくする。二人の身体を拭き飛ばさんばかりだ。

前から後ろから突き上げられ、喉からくぐもつた幸福の声をあげ、腰をくねらせ、尻肉を波打たせては、雌穴から濃厚な蜜を散らす。上の口も下の口も排泄口も大きく広がり、異物を幸せそうにしやぶりたてている。ときおり平手が繰り出されでは、ムチムチとした尻に赤い掌の痕を残していく。

スリングショットに身を包み、そのように卑猥な様を晒す姿は、まさに便女だ。とても、普段の一人からは想像もつかないものだつた。

「あーくそツ、出る出る出るツ、オア、オオオオオ！」

「こつちもだ、子宮のなかザーメンまみれにしてやらア！」

男らが限界を迎える。膣内で肉棒が炸裂する。子宮口と密着した亀頭から、ほびゆるツ、

ほびゆるつと濁液が放たれる。紛れもない膣内射精だ。

先の集団射精で、彼らは最低でも二発はブチまけているはずだ。だというのに、種汁はとてつもなく濃厚な、目の前の雌を孕ませる気満々のものだつた。最高の女に種付けする機会を、存分に活かそうとしているに違ひなかつた。

「んくうう——オオオオオおおおおおおおんつ！」

「ぢゅるう……んふうううううううううううツ！」

無論、そんなものを受け止めて、アクメを迎えずにいられるはずもない。一人仲良く、海老反りになる。思考は真っ白に染まり、視界がスパークする。何かの発作のように全身をガクガクと痙攣させ、喉の奥から幸福だと言わんばかりの声をあげる。

「んぼおツ、あはあツ、あツ、あああ」

「はひいツ、ああツ、あはああんツ」

「へへへ、そおら、ザーメンふりかけてやらあ」

必然、口腔から肉竿は引き抜ける。その顔面に、濁液がぶちまけられていく。チンポでアケメできたご褒美だとでもいうように。普段の理知の消え去つた、淫乱な雌そのものの顔で、己の美貌が汚されていくのを受け止めていく。

「おおウ、おお、いやあ、射精した射精した。すげえ便器だぜこりや」

「ヒヒ、どんだけブチまけても足りねえな。交尾するために生まれたのか?」

二人の膣を貫いていた男どもは、ひとしきり子種を吐き出し終えると、目の前の雌穴を嘲りながら腰を引き抜く。ぶぼつ! と音がしたのは、未だそのヴァギナが収縮しており、肉棒と離れたくないと最後の瞬間まで絡みついていたからだ。

「はひッ、はあッ、あお、おおん……」

「くはあ、あひ、はひ、はへええ……」

絶頂の余韻にある肉体は、腰をしきりにカクつかせている。ヒク、ヒクッと蠢く肉貝は、水揚げされた鯨かなにかのように、ぷしつ、ぷしいつと、潮をまき散らしていた。尻穴で、ねじ込まれた極太バイブがウインウインと踊っている。猥褻という言葉で済む様ではない。

「はひッ、ひいいッ、ひいい」

「へひッ、ほひい、はひいい」

最早呼吸なのか嬌声なのかも分からぬ吐息を漏らしながら、二人は床に崩れ落ちる。

三日三晩、全力で戦闘したとしても、これほど疲弊することはない。大妖怪ほど、必ず余力を残そうとするからだ。それ自体は長く生き残る中で自然と身につく知恵なのだろう。しかしそのぶん、消耗しきるという状況に対する耐性は失われていく。つまり、今の二人は、不慣れな状況に放り込まれて、どうしていいかわからなくなってしまった。鼻水

すら垂らして、すっかり放心しきつて いる。

もつとも、周囲の男達は、いつまでもそんな風に惚けて いるのを許すはずもないが。「おいおいおいおい、いつまでもボケツとしてんじやねえよ。お前ら変態便女の仕事は、ハメ倒されて中出し されてイキ散らすことだろうがよお!」

ぐるんと、視界が回転する。ひっくり返され、仰向けにされたのだ。脱力しきつっていたがゆえに、二人揃つて潰れた蛙のような姿勢になつていた。

「それ、ご開帳つとお」

「あは、あああん」

美しく白い脚を抱えられ、広げさせられる。何をされるかは明白だつた。

「ま、待て、せめて、休憩を。たの、頼むから」

男を押しのけようとするが、媚薬に冒された肉体では、人間の小娘程度の力しか出ない。当然、抵抗しきれるはずもなかつた。懇願が聞き入れされることも、当然ない。

「おらマンコ女共、二本目のチンポだ、心して味わえよッ!」

「ああああああああ！」

「おひいいいいッ！」

二匹の獣の声が室内に反響する。先の挿入のときよりも、いつそ うけたたましかつた。

無理もない。何せ絶頂したばかりのヴァギナを、女殺しの武器で思い切り抉られたのだ。

「へへへッ、いいね、尻尾が布団みたいになつてんぜ」

「妖獸ならではだよなあ、全く、セックスのためにある種族だな！」

仰向けだと尻尾が下敷きになるため、二人ともやや腰が浮いたような体勢になる。そこに覆い被さるように、男達は腰を叩きつけていた。自然、難しくいえば屈曲位、俗にいう種付けプレスの体位に近いものとなる。

「はひツ、ああツ、奥、奥が、ああツ、ああ、あああ！」

「ひい、はげし、無理じや、そんな、アオツ、おおお！」

上から下へ、重力に従つた重量級のピストンが、先ほど膣内射精されアクメしたばかりのヴァギナを思い切り抉る。大きく張り出したエラが、ごりごりと膣襞をめくり返す。先の男に注がれたスペルマを、雁首が搔き出していく。彼女らでなくとも、堪えられるものではなかつた。

「ひい、やめツ、イкуうツ、イкуツ、イкуツ、イつてるからあああツ!?」

「あひい、かんにん、かんにんんツ、無理、むり、むりいいツ！」

「そんな台詞で、誘つてきてよお！」

「やめてやるわけねえだろうが！ ギヤハハハ！」

二人揃つて、甘つたるい嬌声を垂れ流しながら、許しを請う。本人らは至つて本気だが、男らからすれば、誘つているようになら聞こえまい。

現に彼らの目は、相手を甚振ろうという嗜虐心と、淫乱な膣穴をほじくり返してやるという衝動で火がついていた。

「ああッ、あああ、駄目駄目ダメ、おまんこがツ、ああ、ああああ」
「ひいいッ、ひい、かんにん、かんにんをおツ、あひ、ひついいん」

ドチュドチュと、水気たっぷりの音とともに、執拗に抽送が繰り出される。ウテルスを串刺しにされる感覺に、喘ぐ以外のことは何もできない。

いや、他にも、二人とも無意識のうちにできていたことがある。つまり、男の腰にその美脚を絡め、ぐいぐい引き寄せる事だ。さながら蜘蛛が獲物を絡め取るように、または、淫乱な女が、逞しい男に中出しをねだるように。突かれるたびに狂ったように嬌声をあげ、乳房をゆさゆさと揺らす様も、セックスを心の底から望んでいるようにしか見えなかつた。「ああダメだ、クソツ、このエロマンコ、とんでもなく絡みついてきやがる。一発中出しされたからかッ？ 脂が乗つて吸い付いてきて、おおツ、おおおツ……！」

「こつちもだ、なんだよこのエロ狸はよオ。しょせんお手軽便器マンコのクセに、クソツ、こんのには突つ込んだことがねえ、おおおおおツ」

男らが、低く呻く。声色には焦燥のようなものが含まれている。膝がガクガクと震え、ピストンは勢いを増していく。その意味するところは一つ。射精が近いのだ。

「あはあああんッ、あつあつあつあつ、あああ！」

「ひいツ、あおツ、おひい、ツ、ああ、お、ひいい！」

藍とマミゾウに、彼らの会話を聞いている余裕などない。できることといつたら、ただピストンにあわせて、軟体生物のように腰を淫らにくねらせることのみ。

そして、それは奇しくも、この場における最適行動だった。

「おおおおツ、お、ツおつおつお、射精るうううううツ！」

「くそが、おら、ザーメンでイキ狂え、おあツ、あああ！」

天空から降り注ぐようなピストンに、二人の腰がピン打ちされる。濁液が、一気に解き放たれる。一滴も余すところなく、子宮に注ぎ込まれていく。既に一度、膣内射精を受け止めた子宮にだ。

二人分のスペルマが、神聖なる小部屋の中で混ざり合う。精子と精子がぶつかり合い、生存のためのレースを始める。ルールは簡単、卵子と結合出来たものが勝利だ。その熱い競争によつて生まれる熱は、二匹をアクメに導くのに十分すぎた。

「あはつ、ああああああああああああんッ！」

「あひいツ、はひはへツ、おおおおおおんツ！」

本能の悦びが全身を満たし、これ以上ない幸福の声をあげる。もはや妖怪であることを放り出し、獣にすっかり戻りきっていた。

やがて、肉棒が引き抜かれる。半萎えの亀頭からヒクつく膣口にかけて、愛液と精液のミックスジュースが糸をひいていた。

「ツ、はあ、すつげ、射^で精た射^で精た……」

「いや、見てて思つたけど、なんつーか、はえーなお前ら……」

「はア!? ちッげえよ！ コイツらのマンコがやべえんだよ、こんなはずじやなかつた、畜生、ザーメン持つて行かれた……！」

「おいおい、そんなにかよ」

経験者の言葉に、男達は色めき立つた。所詮ごろつきである彼らに、ろくなセックスの経験はない。抱けたとして場末の娼婦だ。そんな彼らに与えられたのが、突っ込んだだけであつという間に射精してしまうほどの、極上の膣穴。

それほどの穴は、この中の誰一人味わったことがない。想像の埒外にある代物に、彼らの性欲は思い切り搔きたてられたようだつた。

「へへへ、次は俺だア！」

いち早く行動した者が、最大の利益を得る。世の常だ。

この場においても同じだ。男共の一人が、藍を素早く抱き寄せる。自分は床板に寝転び、跨がらせる。マミゾウも同じように、男に跨がらされていた。

「そら騎乗位だ、お前みたいにぶん輪姦まわされてイきまくつての変態ならわかんだろうが、ええ？ 自分からチンポ挿入れて腰振れつつてんだよ雌豚ア、あ、狐か」

「き、さま。そんなのは、あはあツ——」

これほど疲弊して、排泄したさに苦しんでいる女に、自分から腰を振れなどと、普通は言えたものではない。こいつらは、まったく、本当にひどい。視界に入れるのも憚られる、最低の下衆どもだった。

だが、そのペニスは硬く勃起している——ゆえに今の藍が、逆らえるはずもなかつた。マミゾウとて、きっと同じだろう。あの卑猥きわまる雌豚顔を見れば、自分と同じようなことを考へているのは明らかだつた。

「いいだろう、この八雲藍の膣穴で、思い切り果てるがいい……」

「へッ、何キメ顔してんだよ、ようするにやりてえだけだろ？ 淫乱が」

肉竿は驚くほどに硬く、ガチガチに勃起していた。当然だ。卑猥極まる乱交シーンを、二回も見せつけられたのだ。今にもはち切れんばかりになつてゐるのも、不思議ではない。

軽く腰を上げ、膣口に押し当てる。散々ほじくり倒された裂け目は、しかし未だ快樂に飽きていないようで、期待するようにキュツ、と収縮する。彼女自身、心を躍らせていた。

「そら、入るぞ、八雲の穴をご賞味あれ、あ、は、ああああん！」

「ふん、せいぜい儂の膣で果てるがいい、あ、あああああっ！」

二人同時に、勢いよく腰を下ろす。放埒な乳房がふるんッ、と震える。いくら貫かれても締まりを失わない雌穴が、ぬぶんッ、と卑猥なノイズを鳴らす。たまらないという声とともに、三度目のセックスが始まった。

「ぬあツ、な、なんじやこりや、おあツ、あ、あ、あああああツ！」

彼らは最初から、認識を間違えていた。便女だ淫乱だ変態だと罵倒しているが、彼らが相手しているのは、幻想郷でも有数の、極上の美女だ。しかもその交尾のテクニックは、並び立つ者がいないほどのものだ。

そんな女達に、自ら腰を振らせる。破滅願望もあるのか？ という話だった。

「すげえ、オアア、やつべやつべ、オアアアツ！」

男は酷く喚き、全身を震わせる。大げさなアクションではない。彼女らの膣は二度の射精を受け止め、ヌルつきながら雄を求める卑猥穴となっている。しかも、上下に前後に左右にナナメ、あらゆる方向にくねる腰が、精を搾り取ろうとする。乳房がばるんばる

んと揺れる様も、むちむちとした尻が波打つ様も、視覚の快楽として男に訴えかけてくる。さらには甘つたるい彼女らの嬌声が、聴覚まで責めてくるのだ。

まさに極楽、酒池肉林だ。いきなり退廃の極みに放り込まれて、たかがごろつき風情が己を保つていられるはずもなかつた。挿入した瞬間に絶頂せずいられただけ、立派だろう。「クッソが、調子乗んなよ、雌どもがよおおッ！」

それでも、彼らにも男としてのプライドがある。挿入れただけで射精た、何もできずにイッたとなれば、仲間内で延々笑われること請け合いだ。そうなつてたまるかと、奥歯をぎゅうと噛みしめているようだ。

さらに彼は、下から腰を突き上げ始めた。腰使いに合わせて、Gスボットを擦り上げる。「あはあんッ！ あッ、ああ、あはあッ、あん、あん、ああ！」

背を反らすようにして、藍はよがる。その聴覚は、ぱしいん、ぱしいんと、肉を打つ音を捉えていた。

「そら、おらおらつ、これでどうだよお、マゾの二ツ岩がよおー！」

「んああッ！ お主、それやめ、それダメエ、あ、おおん！」

マミゾウの暴れんばかりの尻肉に、平手が打ち込まれていた。被虐の悦びに、堪らないという声をあげている。これで一矢報いたぞといわんばかりに、男らは片唇を吊り上げる。

むろん、そんなのは錯覚だ。

「うッ!? やつべ、なんじやこりや、うおおおッ！」

小突き上げられる快楽に、二人の膣はさらに締まりを強めていく。根元から先端にかけ、肉棒を絞り上げるように。その魅惑の、あるいは魔性の膣圧によつて、形勢はまたしても二人の優勢に戻つた。

苛烈な腰使いに、男達は既に限界寸前だ。しかし、我慢できぬと思つているのは、彼らだけではなかつた。

「ああクソ、いつまで経つても順番が回つてこねえ！ 穴はもつと効率よく使うべきだろ、違うかよ!? ええツ!」

「いーやなんも違わねえな、おいケモノ共、ケツの中のもんひり出したいんだつたなア、へつ！ 悅べよ、今すぐひり出させてやるよオ！」

周囲で眺めていた男達が、我慢の限界を迎えたらしい。喚きながら、二人の後ろに立つ。「ちょ、待つ——」

これから何をされるのか、二人とも察した。アヌスに深々とねじ込まれた、極太の玩具。それを、彼らが掴んでいた。引き抜くつもりなのだ。

「そおら、クソ穴から盛大にブチまけやがれ！」

「ひいいいいいいんツ！」

「あ、おおおおおおおおツ！」

ぬぼおツ！と、菊穴が間抜けな音を鳴らす。背骨ごとひっこ抜くような快感に、目の裏がチラつく。情けのない声をあげ、二人揃って雌汁を噴きながら絶頂する。噴き出した潮がすぐ下の男にかかるが、気にする余裕などなかつた。

——漏れる！

直感する。そもそもこのバイブは、二人に対する責めであると同時に、一リットル近く注がれた媚薬ローションを押さえ込む蓋でもあつた。それが失われた今、拡張された菊穴は、くぼツ、くぼツと磯巾着のように収縮を繰り返している。

これでは、粘液の逆流を堪えられるはずもない。八雲の式ともあろうものが、情けなく尻穴から浣腸を噴き出してしまう。だが、慌てて括約筋を締めようにも、膣性交の快楽がそれを許さない。

「あ、おひ、やめ、やめろ、やめて、見ないで、あああああ！」

「お、あ、いかん、とまらん、かわやッ、廁に、んんんんん！」

堪えようと努力したところで、貧弱な堰に押し寄せる濁流を留めることはできなかつた。アヌスはアツという間に決壊し、溜まつていたものが吐き出されていく。

ぶりゅッぶりゅッと音をたて、固形物まじりの透明な粘液が二つの菊穴から噴き出す。衆人環視の中での排泄は、無様以外の何物でもない。消え入りたいくらいだったが、肉体的快楽はそんなこととは無関係に全身を駆け巡る。尻穴から無様に浣腸を吐き出しながら、二人はぶるりと身体を震わせていた。排泄で絶頂しているのだ。それを証明するようにな竿を咥えたままの肉貝はぷしぶしと愛液を噴いていた。

「ひやはは！ 何だ!? 感じた顔しやがつてよお！」

「クソひり出してイツてんのか!? 二匹揃つてとんでもねえ変態だな！」

「ひいッ、ひいッ、止まらない、止まらない、あああ」

「やめ、見るなあッ、あひいッ、ひつ、ひいいいんツ」

透明な媚薬ローションの中に、時折茶色いものが混ざっていた。情けなくみつともない声をあげながら、二人は脱糞の官能で全身を震わせる。どうにかこうにか菊穴を閉じようという努力は、実を結んでいない。早く終われと願うも、一リットルほどもある浣腸液を小さなおちよぽ口から全てブチまるかにかかる時間は、結構なものだった。

「あはあッ、はへッ、く、くそ、ああ、あああ……」

「ひい、このつ、おぬ、お主ら、おぼえておれよお」

結局、二人合わせて二リットルほどの粘液を、たっぷり床に放つことになった。ぬらり

と輝く粘液だまりに、茶色いものが所々浮かんでいる。宿便まで全て出た勢いだ。屈辱と原始的解放感で、頭がどうにかなってしまいそうだった。

「惨めにイきまくりやがつてよ、そんなにスカトロが好きかよ、どうしようもねえ変態が。じゃあ、そんな変態共にお似合いのことをしてやるとするかねえ?」

「は、ちよ、待、待て、貴様、それは、本気か!」

息を飲む。排泄絶頂の余韻に震える二人の後ろに、ぴったりと男が張り付いていたのだ。むつちりとした腰を抱き、あふれんばかりの尻たぶを割り開いて、内容物を一切合切吐き出したばかりのおちょぼ口を露出させる。そこは先ほどまでバイブをねじ込まれたことですかかり拡張され、くぼツ、くぼツと磯巾着のように収縮していた。

彼らはあろうことか、そこに亀頭を押し当てる。肛門性交(アナルセクタス)しようというのだ。本気かと問いたくなるのも、当然のことといえだ。

「当たり前だろ? そのための浣腸なんだからよお」

男はしつれつと言い放つ。確かに、今まさに、浣腸による腸内洗浄が終わつたところだ。そういう意味では相応しいのだろうが——今は膣性交しているところでもあるのだ。その上で、アナルでも? そんなのは、まさに狂つてしまふ。

「逃げてるつもりか? ケツくねらせまくりやがつて、誘つてるようになしか見えねえよ、

そら、クソ穴でヨガらせまくつてやるよ、変態共が、オラア！」

「あひ、待て待て待て待て、あ、あ、おひいいいいいいんツ！」

「やめんか、ちよ、本当にそれは、いかん、あ、あおおおおおん！」

容赦なくねじ込まれる。今度は、玩具ではない。熱く滾る、男根そのものをだ。

肛門や腸は、普通、いきなりの挿入に堪えられるようにはできていない。だがバイブで事前に躊躇られ、ローションで中もドロドロになつていたことで、菊座はすんなりと異物を受け入れた。そしてその持ち主に、神経叢を刺激されたことによるえげつない快楽を、思いつきり叩きつけたのだつた。

「ほひツ、あお、おおんツ、あ、ああツ、ひいい」

「くはあツ、あお、ツ、ほツ、ひ、ぬう、あおおお」

本物のペニスの存在感は、玩具などとは比べものにならない。煮えたぎるほど熱い鉄が、糞穴を性器官として造り替えようとしているようだ。間抜けな声をあげずにはいられない。その声だけ聞いて、八雲の式だと、佐渡の二ツ岩だと判断できるものは、きっとどこにもいないだろう。

「そおら、いつまでも惚けてんじやねえぞ変態どもがア」

「身体の中からチンポで躊躇まくつて、便女にしてやるからなア！」

「あはああツ、くひいツ、おはあツ、あお、おおおおおん！」
「あおツ、おおツ、ひい、くは、おおおおおおんツ！」

息を整える余裕すら、彼女らには与えられない。間髪を入れず、男達は容赦のない抽送を開始する。ぬぼぐぼぐぢゅぬぐぬぶぐぶづぼぐぶぬぶり。計四つの穴から、えげつないピストンサウンドと、粘膜のこねくり返される淫音が響く。二人の、魂を焦がすセクシーボイスが続く。

突き上げられるたびに、ガクガクと全身が震えている。たぶんたぶんと、四つの豊山が水風船のように揺れている。ムチムチとした尻肉は思うがままに揉みしだかれ、沈む指によつて形が変わる。

抽送は激しかつた。膣を貫く男の方は、先ほど手玉に取られかけた鬱憤を晴らすように、細かく執拗なストロークで彼女のヴァギナを征服していく。近くで見れば、膣口がペニスにちゅうちゅう吸い付いている様がよく見えることだろう。尻穴をほじる男の方は、勃起したまま散々待たされた鬱憤を晴らすように、ほとんど引っこ抜いては根元までブチこむストロークで尻穴を耕す。菊門がめくれ返りそうなほどだ。

「あはあああツ、いくうううツ、いく、いく、いくうううんツ」
「やめツ、ほひツ、はひいいツ、ダメじや、もう、無理、むりむりいツ」

ゴリゴリと、体内から音が聞こえていた。ペニスが粘膜を陵辱し、こねくり回し、卑猥器官として造り替えていく音だ。それに伴つて生じる快楽によつて、下半身全体が快楽の泥に浸かっているかのように感じられる。視界のスパークするような性感に、堪えられるはずもなかつた。聞き苦しくも魅力的なよがり声をあげて、髪を振り乱し悶えるばかりだ。「へへへ、とんでもねえな、しかしもう一個、空いてる穴があんなんあ？」

「こんな淫乱共だ、きっと全部チンポで埋めてやんねえと、寂しくて泣いちまうぜ」

「ちげえねえや！ ひやははは！」

最初に誰かが何かをすると、あとからあとから倣うものが現れる。赤信号、皆で渡れば、というやつだ。今もそうだつた。尻穴が貫かれる様を見て、同じく我慢を切らした連中が、二人に群がり始めた。

「そおら、好きなだけしゃぶれや、ケモノが！」

目の前に男が立ち、頭をロツクしてくる。開きっぱなしの口腔は、当然のように肉棒に占拠される。腰を打ち付けられ、ごぶごぶと喉が音をたてる。

「おごッ、ぐぶウツ、んふうウツ、ぢゅる、ぐぶウ、んぶうウツ」

「ぢゅるるッ、ずよッ、んふうウツ、ぢゅウ、ちゅ、れろおおおツ」

三穴をほじくられ、もはやワケが分からぬ。分からぬといふのに、二人とも激しく

魔羅に吸いつき、しゃぶりたてるという芸当ができていた。

意識してのことではない。雌の本能が、淫乱の本性が、そうさせているのだ。

腰のくねりも同様だ。両穴をぐぼぐぼとえげつないピストンで耕される内に、彼女らはそのリズムを掴みつつあった。たっぷり広がった腰を卑猥にくねらせて、さらなる快楽を貪ろうとしていた。セックスのために存在する穴として、これ以上ない働きだつた。

「まだ足りねえってツラアしてやがんなあ、雌どもがよお」

一人あたり三穴、計六つの穴を使つてゐる。それだけやつても、三十人近い男らを満足させるにはなお不足だった。

あぶれた男達は、彼らの身体を使い、好き放題にし始める。手を取つて扱かせるのは勿論のこと、自ら肉棒を、身体のありとあらゆるところに擦りつけていく。髪、耳、首、肩、腋窩に乳房、乳首に腹に背中に腰、両腿に膝裏に足裏。もちろん、先ほど散々精液を塗り込まれた尻尾もだ。

これほど満遍なく肉竿を擦りつけられては、百回風呂に入つて、丁寧に汚れを落としたところで、ペニス臭が残り続けるだろう。

陰茎の臭いを、むわむわ漂わせている女。わたし便女ですよとアピールしているようなものだ。道を歩けば路地裏に連れ込まれ、性奉仕を、セックスを要求されるに違いない。

——ああ、なんて素敵なことだろうか。

「へへへ、素敵なおべべもザーモア汁まみれにしてやるよお」

「ザーメンくせえ服着て帰れよな、よかつたなあ、え？」

まだ、竿は余っている。彼らは、二人が脱ぎ捨てた衣装に目をつけていた。帽子に道士服、ワンピースに、スカートを、奪い合うように手に取り、竿を扱くオカズしていく。視界の端でそれを眺めながら、二人は怒るどころか、恍惚の表情を浮かべていた。

「おおッ、そろそろ射精すぞ雌便器共が。勿論中出しだ、嬉しいだろうが、ええ!?」

「んくうう、フウ、んうッ、ぢゅるるツ、んううう——ツ」

宣言されるまでもなく、藍はこの性交の終わりが近いことを悟っていた。膣内、肛内、口内のモノが、膨れ上がり、今にもはち切れんばかりになつていて。ピストンもスピードをあげ、今や粘膜が擦り切れそうなほどの勢いになつていた。

ぐぶぐちゅぬぼぐぱぢゅるぐばずぶぬほと、ピストンサウンドがベースを速めていく。最高潮に達した瞬間、三穴同時に、スペルマが放たれた。

「おら、中出でイケやケモノ共が、おおおおおおおおおおツ！」

「ひやはは、身体の中精液まみれにしてやらあ、ぬうううう！」

「んぶウ——んううううううううううううううツ！」

「お、ふウ、ぐぶ——んくううううううううん！」

びゅるびゅると、己の中が精液で洗われていく。無数の精子が、八雲藍という存在そのものを蹂躪しているかのようだ。

それは生まれ変わるような快感を、彼女にもたらす。全ての思考を放棄して、ただただセックスの快楽にだけ浸つていればいい。そのように感じさせ、堕落させる官能だ。

藍は素直に、それに従う。ペニスに媚び男を悦ばせる便女のあり方は、最高の輪姦性交を経験した後では、素晴らしいものにしか感じなかつた。

視界の端で、マミゾウと目が合う。基本的には反りの合わない、いけ好かない狸女だ。だが今だけは、志を同じくしているようだつた。目を見れば分かる。あれは快楽に蕩けた淫乱の目、交尾狂いの変態の目だ。自分もきっと、同じ目を浮かべてゐるに違ひなかつた。「そおら、こっち向け淫乱狐、ザーチー汁ぶちまけてやる」

「こっちもだッ、へへへ、きつたねえなあオイ！」

生まれ変わつた二人を寿ぐように、周囲からスペルマがふりかけらける。べちゃべちゃと、あらゆるところに欲望が注がれていく。彼女らはそれを、貴重なものでもいただいたかのように、目を細めて受け止めていく。

身体が白く染まるとともに、意識も白く染まり、官能へと沈んでいった。

* * *

それからはもう、酷かつた。あるいは、素晴らしかった。何人もの男が、次々に二人を貫いては、あらゆる穴に精を吐き出す。味比べと称して交互にねじ込み、それぞれの穴に種を植え付けていく。膣穴が閉じなくなろうが、菊穴が擦り切れようが、彼らにどつては知つたことではないのだ。二人に許されたことといつたら、男を悦ばせ、男で悦び、射精される快樂で絶頂することばかりだった。

「……ようやく一周ですかな、いやはや、何というか、臭い」

「はひい……——はへッ、あひい、ひい」

「おふ、おひい、くひつ、はつ、あおん」

布屋がそのように呟いたころ、二人はもう息も絶え絶えといつたところだった。床には白濁の海ができており、その中央に沈んでいる。スリングショットもハイヒールも、行為のうちにどこかへ行つてしまつた。正真正銘の素っ裸だ。その身体に子種で汚れていないところは、一平方ナノメートルたりともなかつた。

「それにしてもあの感じようときたら。便女扱いされて、雑にオマンコされるのがよほど

気に入ったと見える。どうですか八雲殿、今の気分は？　ああ、聞こえちやいないか」ぐつたりとした二人には、指一本動かす余裕はない。布屋の言葉に反応することなど、できるはずもなかつた。塩屋が、見下しきつた、嗜虐の浮かぶ目で見つめている。

「ふむ。この程度でへばるとは。だがまだまだ終わらんぞ？」次はどうしてくれようか。もう一周輪姦してやろうか、それともその姿のまま、里に放り出してやるか？　本物の獣、たとえば豚でも連れてきて、獸同士まぐわわせるのもいいな。楽しみだろう？」

「は——ひツ」

相変わらず、二人の瞳は虚ろだ。それでもその唇は、微かに蠢いてみせた。

「——……はい、どうぞ私めでお楽しみくださいませ……」

「八雲藍と二ツ岩マミゾウの淫乱穴に、種を植えてくださいませえ」

無意識に漏れ出たそれは、完全なる精液便女の台詞だった。執拗な輪姦により、心の底まで淫乱に成り果てたことの何よりの証明だつた。男らはゲラゲラと笑う。

「ははは！　いかに幻想郷の二大妖獣といえど、チンポ漬けにしてやればこんなものか。夜はまだまだ長いんだ、たっぷりと楽しませてもらうとも。さて——私と布屋の主人で、次の余興を考えるとするか。それまではお前ら、その女共と引き続き遊んでやれ」

「へへへ、言われずとも！」

「こんな女、いつぺん種付けしただけじゃ足んねえよ、次だ、次イ！」

塩屋の言葉に、ごろつきどもが色めき立つ。白濁まみれとはいえ相変わらず極上の肢体へむしやぶりつき、絶世の美女を下品な雌便器に墮していく。あらゆる穴に肉竿をねじ込まれながらにして、二人はまた、快楽の底へと沈んでいった。